

第3章 高等学校調査

I. 調査の手続き

1. 予備的インタビュー調査

(1) 目的

高等学校を対象とした質問紙調査及びインタビュー調査の準備に向けて、指導上課題が生じた困難事例の収集を通し、高等学校における障害のある生徒の進路指導の現状と課題を把握することを目的とする。

(2) 方法

①調査対象

研究協力者及び教育委員会から紹介を受けた高等学校、文部科学省の発達障害のある生徒への支援に関する各種モデル事業に参加した実績のある高等学校、当研究所の研究・研修等でこれまでに協力を得た高等学校等のうち、障害のある生徒の進路指導について特色ある取組を行っていると考えられる学校をチームで検討し、5校選定した。その際、課程に偏りがないうよう、全日制・定時制・通信制から各1校含めることとした。

②調査方法

進路指導担当者及び特別支援教育コーディネーターを対象に、令和3（2021）年9月から令和4（2022）年3月にかけて、インタビュー形式で調査を行った。調査項目は事前に回答者が確認できるよう、メールで送付した。調査は研究チームの担当者1名が学校を訪問し、事前に送付した質問項目に基づき、半構造化によるインタビューを行った。また、回答者の同意を得た上で書面での記録及び録音を行った。所要時間は約1時間であった。

③調査内容

高等学校（全日制普通科、全日制専門学科、定時制・通信制等）から、大学進学や企業への就職等を行った障害のある生徒の進路指導に関する現状及び課題、関係機関との連携に関する状況等について把握した（詳細は巻末の資料2「高等学校調査 予備的インタビューガイド」参照）。

なお、調査内容は、調査対象の高等学校における進路指導の現状及び課題を適切に把握できるよう、事前に、高等学校にて進路指導に取り組む教員1名の意見を得て設定した。

④倫理的配慮

調査の実施方法について、事前にインフォームド・コンセントの手続き、個人情報の取り扱い、データの管理の方法等に関して、所属機関倫理委員会による審議を受け、承認を得た。また、調査対象校の所属長及び調査対象者に対しては、書面及び口頭にて調査の趣旨と目的、参加と撤回の自由、守秘義務等の倫理的配慮事項を伝え、調査協力に対する同意書への記入をもって、研究協力への同意を得た。

2. はがき調査（予備調査）

（1）目的

高等学校を対象とした質問紙調査及びインタビュー調査の準備に向けて、高等学校全体における障害のある生徒の把握状況、障害を意識した進路指導実施の有無等の概要を把握するとともに、高等学校を対象とした質問紙調査の項目作成及び対象校の選定につなげることを目的とする。

（2）方法

①調査対象

令和3年度学校基本調査（文部科学省，2021a）の結果と市販の全国学校一覧を基に、全日制・定時制・通信制高等学校計 5,097 校のうち、併置校を除く、国立・公立・私立の全日制（4,173 校）、定時制（125 校）、通信制（132 校）、合計 4,430 校を対象に実施した（表 3-1-1）。

表 3-1-1 対象校の内訳

	全日制	定時制	通信制
国立	17 校	0 校	0 校
公立	2,912 校	122 校	11 校
私立	1,244 校	3 校	121 校
合計	4,173 校	125 校	132 校

②調査方法

令和4（2022）年7月に郵送により、依頼文及び回答用紙となる往復はがき（調査票一式）を調査対象となる高等学校に送付した。また、事前に所管する都道府県及び政令市教育委員会に書面にて調査の実施を周知した。調査票の回収は、郵送により、令和4（2022）年7月から8月にかけて実施した。

③調査内容

高等学校の情報及び、令和元（2019）年度から令和4（2022）年度に在籍する、障害

が「ある」もしくは「あると思われる」生徒の障害種についてたずねた。おもな調査内容は、表3-1-2の通り（詳細は巻末の資料3「高等学校調査 はがき調査票」参照）。

表3-1-2 おもな調査内容

視点	内容
回答校の属性	・課程、学科、通級指導教室の設置、進路指導におけるキャリア・パスポートの活用状況
障害のある生徒の状況	・教員の判断による、障害が「ある」、「あると思われる」生徒の障害種
障害のある生徒への進路指導等の状況	・障害が「ある」、「あると思われる」生徒の進路指導で連絡・連携をとった機関 ・障害が「ある」、「あると思われる」生徒の特性に応じて実施した進路指導の内容
その他	・学校名〈任意〉

④倫理的配慮

調査の実施方法について、事前にインフォームド・コンセントの手続き、個人情報の取り扱い、データの管理の方法等に関して、所属機関倫理委員会による審議を受け、承認を得た。また、調査対象校の所属長及び調査対象者に対しては、書面にて調査の趣旨と目的、参加と撤回の自由、守秘義務等の倫理的配慮事項を伝え、研究協力に同意した場合に、調査票に記入するよう依頼した。これにより、調査票の返送（または返信）をもって、調査への同意を得たものと見なした。

3. インタビュー調査

(1) 目的

高等学校を対象とした質問紙調査の項目作成に向けた準備と、発達障害等のある生徒の進路指導に関するガイドブックの作成に向け、高等学校における障害のある生徒への進路指導の実態把握と、課題解決に向け参考となる好事例を把握することを目的とする。

(2) 方法

①調査対象

研究協力者による紹介及び、予備調査として実施したはがき調査の結果から選定した学校（12校）の教職員（主に進路指導担当者）とした。

②調査方法

研究協力者及び、選定した学校を対象にインタビュー形式で調査を行った。なお、調査の実施に当たっては、事前に各校の管理職に電話で調査の目的を伝え、協力の得られた学校に対し、依頼状とインタビュー項目を送付した。調査は、研究チームの担当者1～2名

が学校訪問もしくはオンラインにより、事前に送付した質問項目に基づき、半構造化によるインタビューを行った。また、回答者の同意を得た上で書面での記録及び録音・録画を行った。所要時間は約1時間であった。調査は令和4（2022）年7月から令和5（2023）年12月にかけて段階的に実施した。

③調査内容

おもな調査内容は、以下のとおり（詳細は巻末の資料4「高等学校調査 インタビューガイド」参照）。

- ・インタビュー対象校の属性（課程、学科、通級指導教室の設置）〈選択式〉
- ・インタビュー対象者の属性（教職経験年数・校務分掌等）
- ・各事例について

進路先、障害者手帳・診断の有無、教育歴、入学時の引継ぎ状況、本人・保護者の障害理解、連携した関係機関、事例の具体的な取組（進路先決定のプロセス、校内の進路指導体制、生徒の変容）、好事例と判断した事項、進路先への引継ぎ状況

④倫理的配慮

調査の実施方法について、事前にインフォームド・コンセントの手続き、個人情報の取り扱い、データの管理の方法等に関して、所属機関倫理委員会による審議を受け、承認を得た。また、調査対象校の所属長及び調査対象者に対しては、書面及び口頭にて調査の趣旨と目的、参加と撤回の自由、守秘義務等の倫理的配慮事項を伝え、調査協力に対する同意書への記入をもって、研究協力への同意を得た。

4. 質問紙調査（本調査）

（1）目的

高等学校における障害のある生徒への進路指導に関する現状や課題、好事例等を具体的に把握し、発達障害等のある生徒の進路指導に関するガイドの開発に結び付けることを目的とする。

（2）方法

①調査対象

予備調査として実施したはがき調査で学校名の記名回答のあった、公立高等学校 1,039校を対象とした（表3-1-3）。また回答者は、可能な限りはがき調査に回答した教職員とした。

表 3-1-3 対象校の内訳

全日制	定時制・通信制
983 校	56 校

②調査方法

令和 4（2022）年 12 月に郵送により、依頼文及び回答用紙（調査票一式）を調査対象となる高等学校に送付した。また、事前に所管する都道府県及び市町村教育委員会に書面にて調査の実施を周知した。調査票の回収は、郵送又はメール送信により、令和 4（2022）年 12 月から令和 5（2023）年 1 月にかけて実施した。

③調査内容

おもな調査内容は、表 3-1-4 の通り（詳細は巻末の資料 5 「高等学校調査 調査票」参照）。内容の設定に当たっては、はがき調査（予備調査）及びインタビュー調査を参考とした。

表 3-1-4 おもな調査内容

視点	内容
回答校の属性	・課程、学科、通級指導教室の設置、卒業後に就職を目指す生徒の割合 等
障害のある生徒への進路指導等の状況	・特性に応じて取り組んでいる進路指導等に関する指導・支援〈選択式〉 ・自校では対応が困難であり、連携が必要と考える内容 ・自校では対応が困難な内容に対する連携の期待〈自由記述〉等
障害のある生徒の進路指導等に関する好事例	・障害への気づき、診断の有無、障害者手帳の取得状況 ・生徒の進路先 ・生徒の課題やニーズ等と実施した指導・支援の内容〈自由記述〉等

④倫理的配慮

調査の実施方法について、事前にインフォームド・コンセントの手続き、個人情報の取り扱い、データの管理の方法等に関して、所属機関倫理委員会による審議を受け、承認を得た。また、調査対象校の所属長及び調査対象者に対しては、書面にて調査の趣旨と目的、参加と撤回の自由、守秘義務等の倫理的配慮事項を伝え、研究協力に同意した場合に、調査票に記入するよう依頼した。これにより、調査票の返送（または返信）をもって、調査への同意を得たものと見なした。

Ⅱ. 結果と考察

1. 予備的インタビュー調査

(1) 調査の対象とした高等学校と事例の概要

調査を実施した学校の情報と各事例の特徴を表3-2-1に示す。

なお、インタビュー調査を行った高等学校の概要、障害のある生徒の進路指導における学校としての課題と対応状況等、各校で収集した事例の詳細は、別冊の資料集に掲載した。

表3-2-1 予備的インタビュー調査の対象とした学校と事例の概要

	課程・学科等	事例の概要
A校	全日制（課程制） 普通科・専門学科	就労希望があったが、働くイメージが持てなかった生徒の事例
		自己理解、進路の適性という課題のあった生徒が進学した事例
B校	全日制（単位制） 総合学科	卒業後の大学生活や就職した後の生活について、具体的なイメージを持つことに課題のある事例
C校	定時制（単位制） 専門学科（工業）	環境が変わることへの不安が大きい事例
		本人自身に特性理解の課題があり、就職先選択に時間を要した事例
D校	全日制・通信制 （単位制）普通科	働くことのイメージが難しく、関係機関との連携を進めた事例
		働くことのイメージが難しく、保護者との連携を進めた事例
E校	定時制（単位制） 普通科	コミュニケーションに課題があり、進学に向けた面接指導等を必要とした事例
		コミュニケーションに課題があり、就労先で仕事が継続できるよう保護者との連携を必要とした事例
		コミュニケーションに課題があり、保護者や関係機関との連携も困難だった事例

(2) 高等学校における進路指導の課題と対応

今回の調査対象校は、全日制、定時制、通信制と課程や学科は異なるものの、共通した課題への対応が見られた。1つめは、「生徒自身の特性への理解不足」、2つめは「進路先のイメージの持ちづらさ」への対応である。

1つめの「生徒自身の特性への理解不足」については、発達障害等のある生徒の場合、障害特性を含め、得意・不得意といった自身の特性についての理解が不十分なことが課題となっていた。そのため、自己理解を促すような機会の提供を行うほか、失敗経験が多く自己肯定感が低い生徒に対しては、できることを増やし、自信を持って取り組めるような機会を増やす等の指導が行われていた。また、生徒の自己理解や自己肯定感、対人コミュニケーション、生活面等の力を培うための指導は、進路指導の枠組みのみならず、通級による指導や学校設定科目等でも行われていた。

2つめの「進路先のイメージの持ちづらさ」については、就職の場合、卒業後の就労や生活のイメージが持てないこと、進学の場合、大学での学習や生活のイメージが持てないこと、また、大学卒業後の就労や生活のイメージが持てないことが課題となっていた。このため、各学校では、将来の就労や生活等のイメージを持てるように、インターンシップ等、進路指導の枠組みで指導を行っている状況が見られた。

上記2つの課題解決には、学校だけの取組では限界があり、保護者や関係機関と連携をすることで対応を行っていた。一方、家庭との連携が望めない生徒の場合、進路指導の困難さが顕著になる傾向が見られた。

2. はがき調査（予備調査）

回収率 33.8%

※有効回答数は、1,498 件。また、分析ごとに有効回答数は異なる。

（1）回答校の属性

回答校の設置形態として最も多かったのは「公立」であり 72.5%、次いで「私立」が 26.8%、「国立」が 0.7%であった（図 3-2-1）。

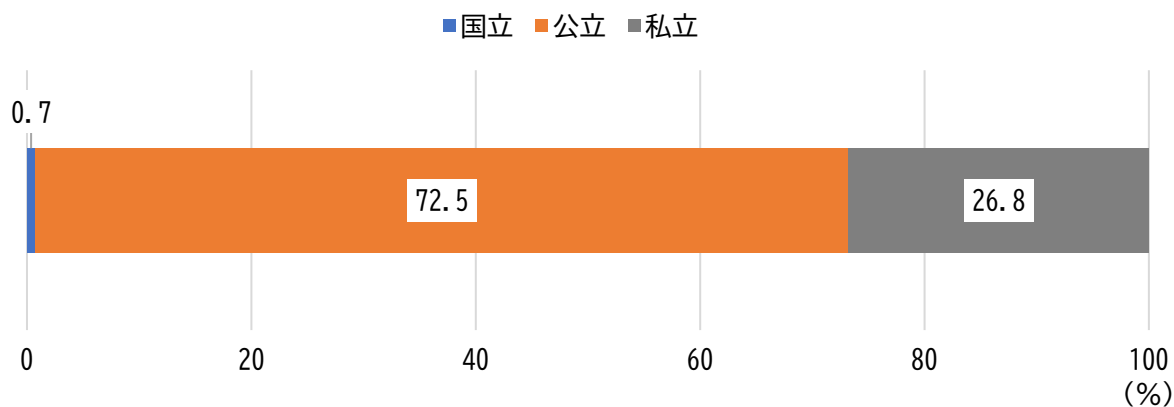


図 3-2-1 設置形態 (n=1,498)

回答校の課程・学科等として最も多かったのは「全日制」であり 93.5%、次いで「定時制」が 3.7%、「通信制」が 2.8%であった（図 3-2-2）。

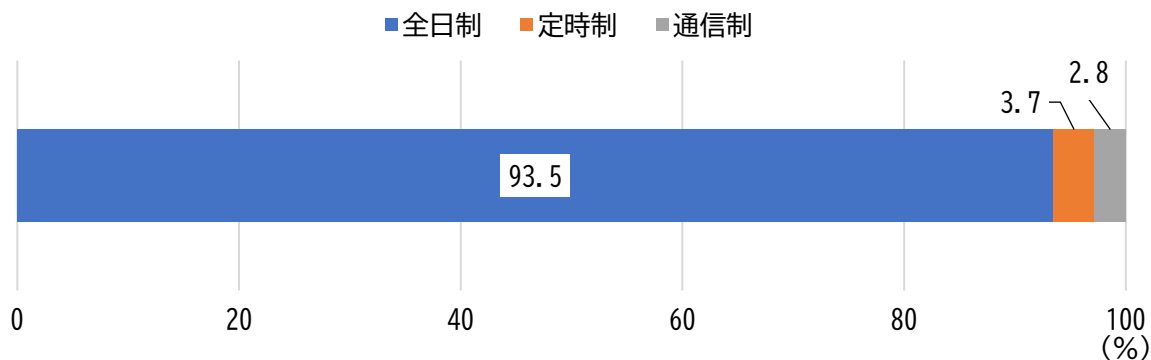


図 3-2-2 課程・学科等 (n=1,498)

通級指導教室の設置状況は、「なし」が 85.7%、「あり」が 13.1%、「設置予定」が 1.2%であった（図 3-2-3）。

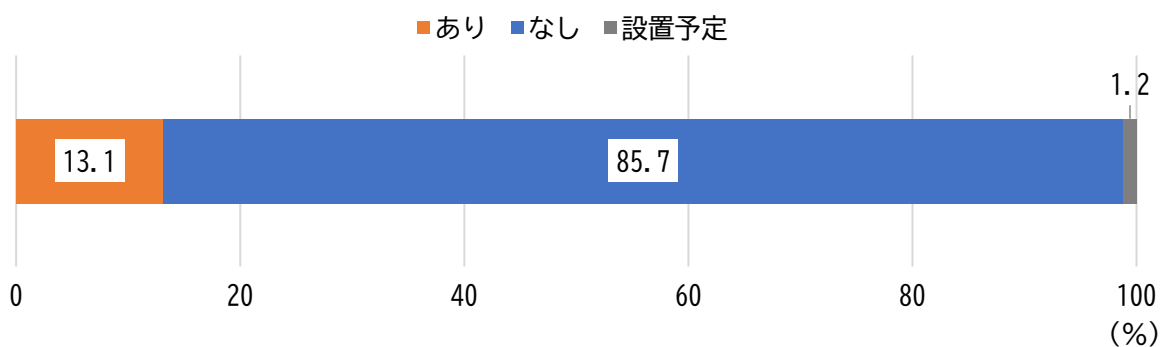


図 3-2-3 通級指導教室の設置状況 (n=1,456)

進路指導におけるキャリア・パスポートの活用状況は、「活用していない」が 53.3%、「活用している」が 46.7%であった（図 3-2-4）。

キャリア・パスポートは、令和 2（2020）年 4 月より、全国の小・中・高等学校及び特別支援学校で活用されることになっている。国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2020）が 2019 年に実施した調査によれば、高等学校においてキャリア・パスポートを作成していない学校は約 5 割程度であった。キャリア・パスポートの本格実施が始まり、作成状況は高まっていると想定されるが、進路指導での活用は半数程度にとどまっていることがうかがえる。こうした中、障害のある生徒に対するキャリア・パスポートの活用についても途上段階にあることが推測される。

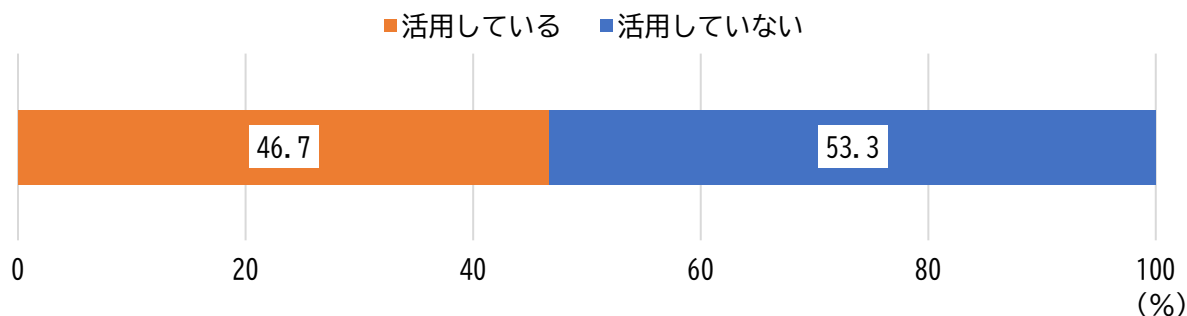


図 3-2-4 キャリア・パスポートの活用状況 (n=1,398)

（2）障害のある生徒の在籍状況

高等学校は義務教育と異なり、生徒が学校を選択して入学することから、課程や学科により在籍する生徒の状況も異なる。高等学校に進学する生徒が多様化する中、定時制・通信制課程は、多様な学びのニーズへの受け皿としての役割を増している現状がある。そこで、学校に期待されている実態に基づく解釈のために、1つの分析軸として全日制と定時

制・通信制といった課程別に結果を示した。

全日制において「障害がある」または「あると思われる」生徒の状況として最も多かったのは「発達障害」であり 84.5%、次いで「聴覚障害」が 29.1%、「精神障害」が 23.9%と続いていた。なお、発達障害の内訳は、「ADHD」が 74.2%と最も多く、次いで「ASD」が 64.1%、「LD」が 53.1%であった。

定時制・通信制において「障害がある」または「あると思われる」生徒の状況として最も多かったのは「発達障害」であり 99.0%、次いで「知的障害」が 68.0%、「精神障害」が 63.9%と続いていた。なお、発達障害の内訳は、「ADHD」と「ASD」がそれぞれ 95.9%と最も多く、次いで「LD」が 92.8%であった。

一方、「なし」と回答した高等学校もあり、その傾向は全日制に高かった（図 3-2-5）。

本調査は、学校に各障害特性のある生徒の在籍の有無をたずねるものであったが、全国高等学校定時制通信制教育振興会（2018）が定時制・通信制に実施した調査では、特別な支援を必要とする生徒の割合は 15.8%（定時制では 20.1%）、また、LD の診断のある生徒の割合は 4.0%（定時制では 3.8%）であったことが示されている（ADHD、ASD については結果なし）。この値は、高等学校の通常の学級に特別な教育的支援を必要とする生徒が 2.2%在籍しているという文部科学省（2022b）の調査結果（全日制・定時制対象）から見ると高い割合である。本調査において全日制と定時制・通信制で発達障害等のある生徒の在籍状況の認識が異なっていた理由の 1 つとして、全日制では、発達障害のある生徒への気づきが乏しい状況があることが考えられる。

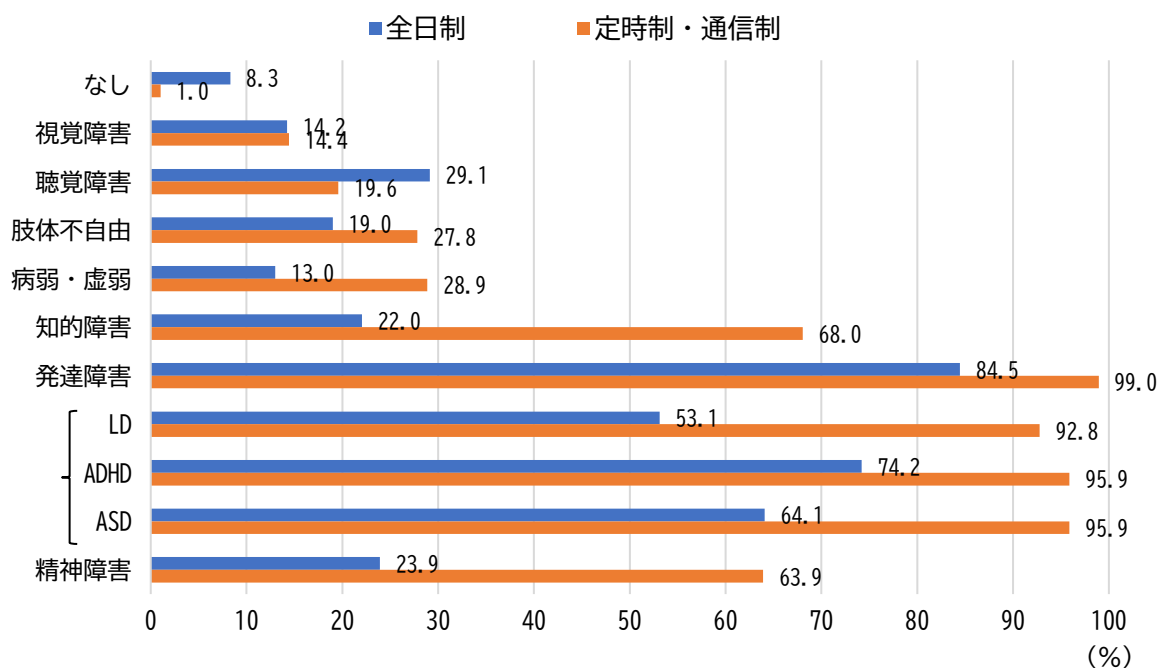


図 3-2-5 障害のある生徒の在籍状況（全日制：n=1,384、定時制・通信制：n=97）
複数回答（*各障害特性の生徒が1名以上在籍する場合に「有」と回答）

以下では、発達障害等のある生徒が在籍する学校における結果を紹介する（障害のある生徒のうち、発達障害のある生徒のみ在籍する学校でない点に留意されたい）。

（３）発達障害等のある生徒が在籍する学校が生徒の進路指導で連絡・連携を取った機関

全日制において発達障害等のある生徒の進路指導で連絡・連携を取った機関として最も多かったのは「医療機関」であり 33.0%、次いで「福祉・労働機関」が 24.1%、「大学」が 21.6%、「特別支援学校」が 19.1%と続いていた。また、「なし」という回答も 26.9%あった。

定時制・通信制において発達障害等のある生徒の進路指導で連絡・連携を取った機関として最も多かったのは「福祉・労働機関」であり 53.2%、次いで「医療機関」が 47.9%、「企業」が 41.5%、「専門学校」が 33.0%と続いていた。

「なし」という回答を除く値から見ると、全日制においては 73.1%、定時制・通信制においては 89.4%がいずれかの機関と連絡・連携を取っていた。また、各機関との連携は、いずれも全日制に比べ、定時制・通信制において多く選択されていた（図 3-2-6）。

全国高等学校定時制通信制教育振興会（2018）の調査では、特別な支援の具体的な内容として、「専門機関との連携」の状況も報告されている。その結果、54.0%（定時制では 54.6%）が専門機関との何らかの連携を行っていた。本調査においても専門機関に該当する医療や福祉・労働機関との連携の割合は約 5 割であり、近い値となっている。定時制・通信制は、全日制に比べ発達障害等のある生徒の在籍が確認されやすく、そのため、必要な指導・支援に向けた連携につながりやすいことが考えられる。

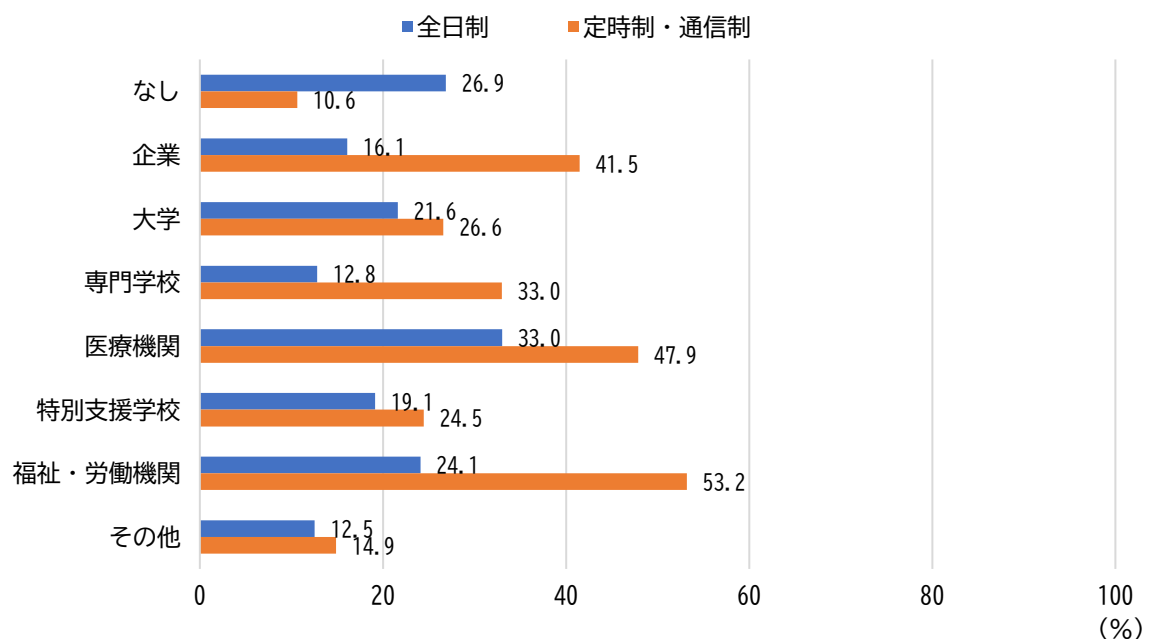


図 3-2-6 発達障害等のある生徒が在籍する学校が生徒の進路指導で連絡・連携を取った機関（全日制：n=1,124、定時制・通信制：n=94）複数回答

(4) 発達障害等のある生徒が在籍する学校が生徒の特性に応じて実施した進路指導の内容

全日制において、発達障害等のある生徒の特性に応じて実施した進路指導の内容として最も多かったのは「保護者との連絡・面談」であり78.4%、次いで「校内連携」が55.9%、「進路希望に関する面談」が55.7%、「進路先への連絡・連携」が35.8%、「生活面の指導・支援」が33.1%と続いていた。

定時制・通信制において発達障害等のある生徒の特性に応じて実施した進路指導の内容として最も多かったのは「保護者との連絡・面談」であり86.0%、次いで「進路希望に関する面談」が76.3%、「対人・コミュニケーションの力を促す指導・支援」が60.2%、「校内連携」と「進路先への連絡・連携」が59.1%、「生活面の指導・支援」と「障害特性の理解を促す指導・支援」が48.4%と続いていた（図3-2-7）。

「保護者との連携」は、全日制、定時制・通信制ともに実施の割合が高かった。他方、進路指導に関わる取組のうち、進路先からの期待でも挙げられていた、「対人・コミュニケーションの力を促す指導」「生活面の指導・支援」「障害特性の理解を促す指導・支援」、また、メンタル面の安定にもつながると考えられる「自己肯定感を促す指導・支援」については、全日制よりも定時制・通信制のほうが実施の割合が高かった。しかし、その値は対人コミュニケーションを除き、5割を下回っており、必ずしも定時制・通信制において発達障害等のある生徒の特性に応じた進路指導が行われているわけではないことがうかがえる。

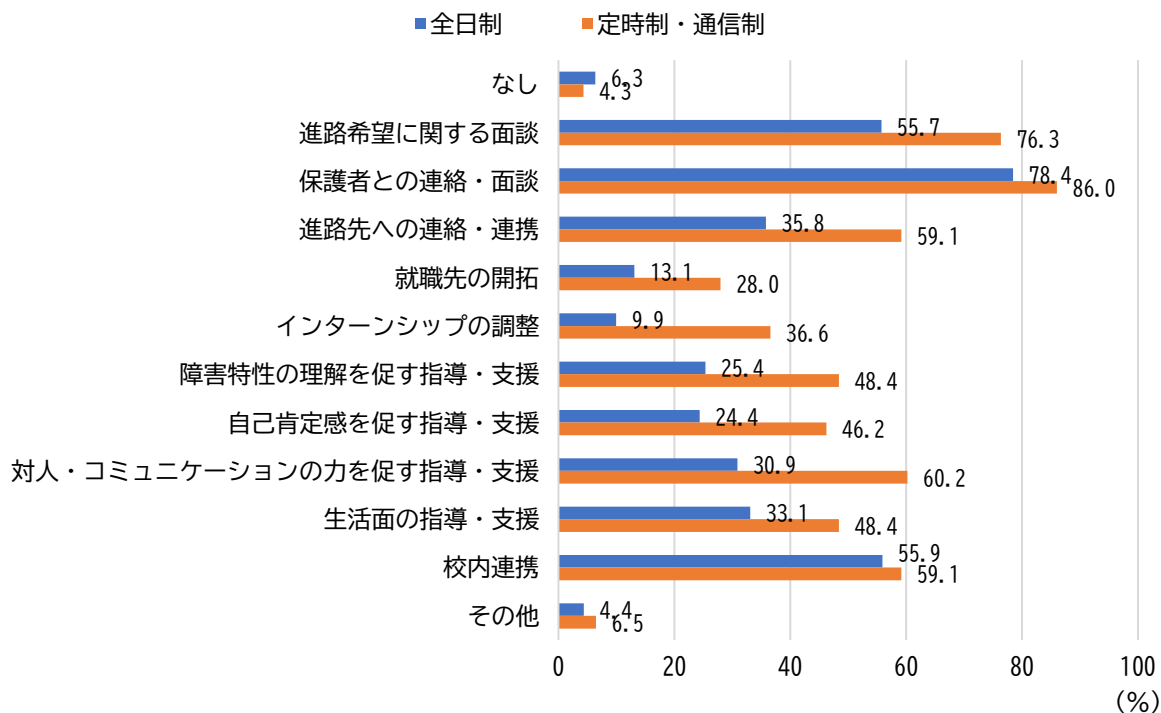


図3-2-7 発達障害等のある生徒が在籍する学校が生徒の特性に応じて実施した進路指導の内容（全日制：n=1,136、定時制・通信制：n=93）複数回答

3. インタビュー調査

調査を実施した学校の情報と各事例の特徴を表3-2-2に示す。今回の調査では、12校を対象とした。対象校の内訳は、普通科3校、専門学科4校、総合学科3校、普通科と専門学科の併設2校である。通級指導教室の設置については、7校が設置しており、5校は設置していない。ただし、通級指導教室を設置する学校のうち、1校はインタビュー対象事例生徒が在籍中は、設置されていない状況であった。また、今回の調査では、12校で複数事例の提供を受けたため、事例は26名となった。

表3-2-2 インタビュー調査の対象校と対象者の概要

学校番号	学校の特徴			インタビュー対象者				
	課程	学科	通級の設置	教職経験年数	校務分掌			
					コーディネーター	学級担任	通級担当	その他
1	全日制	専門学科	あり	39年	●		●	●
2	全日制	専門学科	なし	23年	●			
3	全日制	普通科	あり	10年	●		●	●
4	全日制	総合学科	あり(当該生徒の在籍中はなし)	38年目	●			
5	定時制	専門学科 普通科	あり	30年目	●		●	
				15年目	●			
6	全日制	総合学科	あり	26年目				●
				22年目			●	
7	全日制	専門学科	なし	4年目	●	●		
8	定時制	普通科	あり	12年目			●	
9	全日制	専門学科 普通科	あり	9年目	●		●	
10	全日制	専門学科	なし	24年目		●		●
11	全日制	普通科	なし	33年目				●
12	全日制	総合学科	なし	21年目	●			●

対象校から26事例を収集した。事例の概要を表3-2-3、表3-2-4に示す。

まず、事例生徒の進路の方向性、障害者手帳の取得状況と診断名、小中学校の教育歴について表3-2-3に示す。

26 事例のうち、進学した事例は7件、インターンシップを経験し就職した事例は10件、インターンシップを経験せずに就職した事例は6件、福祉サービスを利用した事例は3件であった。

26 事例のうち、24 事例は障害の診断を受けていた。このうち、発達障害に該当する障害は20件、知的障害が4件であった。障害者手帳の取得状況は、療育手帳を取得している事例が9件、精神障害者保健福祉手帳を取得している事例が8件であった。診断はあるが障害者手帳を取得していない事例は7件であった。

26事例のうち、特別支援学校に在籍していた事例はなく、小学校で通級による指導を受けていた事例が2件、小中学校で特別支援学級に在籍していた事例が5件、小学校のみ特別支援学級に在籍していた事例が2件、中学校のみ特別支援学級に在籍していた事例が4件であり、13件は小中学校ともに通常の学級に在籍していたと推定される事例であった。

なお、通常の学級に在籍していた事例のうち、9件は引継ぎがなく、詳細な教育歴を把握できなかった。

表 3-2-3 事例の概要 (1)

事例番号	進路の方向性				診断名	手帳の取得状況			教育歴					引継ぎなし	
	進学	就職(S有)	就職(S無)	福祉サービス		なし	療育手帳	精神障害者保健福祉手帳	小学校			中学校			
									通級	特学	通常の学級	通級	特学		通常の学級
1-A		●				●			●				●		
1-B		●			発達	●					●			●	
2-A	●				発達	●					●			●	●
2-B			●		発達	●					●			●	●
3-A		●			知的		●						●		
3-B		●			発達			●		●			●		
4-A			●		発達			●			●			●	
4-B	●				発達	●					●			●	●
5-A			●		知的		●				●			●	
5-B				●	発達			●			●			●	●
6-A		●			発達			●		●				●	
6-B			●		発達		●				●			●	

事例番号	進路の方向性				診断名	手帳の取得状況			教育歴						
	進学	就職(IS有)	就職(IS無)	福祉サービス		なし	療育手帳	精神障害者保健福祉手帳	小学校			中学校			引継ぎなし
									通級	特学	通常の学級	通級	特学	通常の学級	
6-C	●					●					●			●	
7		●			発達			●			●			●	
8-A				●	発達			●		●			●		
8-B				●	発達			●			●			●	●
9-A			●		知的		●								
9-B			●		知的		●								
10		●			発達			●		●			●		
11-A	●				発達		●				●			●	●
11-B	●				発達		●			●				●	●
11-C		●			発達	●					●			●	●
11-D		●			発達	●				●			●		●
12-A	●				発達	●				●			●		
12-B	●				発達		●		●				●		
12-C		●			発達		●						●		

*IS:インターンシップ

入学時の引継ぎ状況と本人と保護者の障害の理解等の状況を表3-2-4に示す。

26事例のうち、入学時に個別の教育支援計画の引継ぎがあった事例は7件、なかった事例が12件、不明が7件であった。また、情報共有をした事例は21件、しなかった事例は5件であった。中学時の担任との情報交換をした事例は10件で、しなかった事例は14件、不明が2件あった。通常の学級に在籍している事例が多いことから、中学校の学級担任以外の教員から情報提供は受けているものの、入学時に個別の教育支援計画の引継ぎはされていない事例が多いことが特徴である。

また、障害の理解については、26事例中、保護者に理解があると捉えている事例が23件、本人に理解があると捉えている事例が21件あり、好事例の要因として、自己理解が進んでいる事例が選定されているようであった。

表 3-2-4 事例の概要 (2)

事例番号	入学時の引継ぎ状況								障害の理解等					
	個別の教育支援計画			入学時の情報共有		中学時の担任との情報交換			生徒の障害の状態に対する保護者の理解			生徒の障害の状態に対する自己理解		
	あり	なし	不明	あり	なし	あり	なし	不明	あり	なし	不明	あり	なし	不明
1-A	●			●			●		●			●		
1-B			●	●				●	●			●		
2-A		●			●		●		●			●		
2-B		●		●			●		●			●		
3-A	●			●		●			●				●	
3-B	●			●		●			●			●		
4-A	●			●		●			●			●		
4-B		●			●		●		●			●		
5-A		●		●			●		●			●		
5-A		●		●			●		●			●		
6-A		●		●			●		●			●		
6-B		●		●			●		●				●	
6-C		●		●			●			●			●	
7		●		●		●			●			●		
8-A		●		●			●		●			●		
8-B		●		●			●		●			●		
9-A			●	●			●		●			●		
9-B			●		●			●	●			●		
10		●			●		●		●			●		
11-A			●	●		●			●			●		
11-B			●	●		●			●			●		
11-C			●		●		●			●			●	
11-D			●	●		●				●			●	
12-A	●			●		●			●			●		

事例番号	入学時の引継ぎ状況									障害の理解等					
	個別の教育支援計画			入学時の情報共有		中学時の担任との情報交換			生徒の障害の状態に対する保護者の理解			生徒の障害の状態に対する自己理解			
	あり	なし	不明	あり	なし	あり	なし	不明	あり	なし	不明	あり	なし	不明	
12-B	●			●		●			●			●			
12-C	●			●		●			●			●			

進路指導に当たり連携した関係機関、この事例を好事例と判断した事項、進路先への引継ぎ状況を表3-2-5に示す。

26事例のうち、連携した関係機関として、教育機関については「特別支援学校」が2件、「特別支援学級」が1件、「通級指導教室」（自校設置含む）が6件であった。

教育分野以外で連携した関係機関は、「保健・医療機関」が15件、「福祉・労働機関」が12件であった。

また、今回提供を受けた事例を好事例と判断した理由を複数回答でたずねたところ、6選択肢中、「自己理解を促す指導」が効果的であったと捉えているものが19件、「保護者との連携」が効果的であったと捉えているものが18件、「関係機関の連携」が効果的であったと捉えているものが17件、「心理面をサポートする指導・支援」が効果的であったと捉えているものが16件と上位を占めていた。

最後に、26事例のうち、高等学校から進路先に個別の教育支援計画を引き継いだ事例は14件、卒業時に進路先に情報共有をした事例は12件であった。

表3-2-5 事例の概要（3）

事例番号	連携した関係機関			この事例を好事例と判断した事項									進路先への引継ぎの状況					
	教育機関			保健・医療機関	福祉・労働機関	関係機関の連携	自己理解を促す指導	心理面をサポートする指導・支援	生活面をサポートする指導	保護者との連携	働くことを意識つける指導	その他	個別の教育支援計画			卒業時の情報共有		
	特別支援学校	特別支援学級	通級指導教室										あり	なし	不明	あり	なし	不明
1-A			●				●	●		●		●		●				
1-B			●				●	●		●		●		●				●

事例番号	連携した関係機関				この事例を好事例と判断した事項							進路先への引継ぎの状況					
	教育機関			保健・医療機関	福祉・労働機関	関係機関の連携	自己理解を促す指導	心理面をサポートする指導・支援	生活面をサポートする指導	保護者との連携	働くことを意識つける指導	その他	個別の教育支援計画		卒業時の情報共有		
	特別支援学校	特別支援学級	通級指導教室										あり	なし	あり	なし	不明
2-A				●		●	●	●		●				●	●		
2-B				●		●	●	●	●					●		●	
3-A					●	●	●	●					●		●		
3-B		●		●	●	●	●			●			●		●		
4-A				●	●	●	●			●			●		●		
4-B							●			●			●		●		
5-A				●	●	●				●			●			●	
5-B				●	●	●	●			●	●			●	●		
6-A			●	●	●	●	●				●		●	●			
6-B			●	●	●	●	●	●	●	●	●		●			●	
6-C			●	●			●			●		●					
7				●		●				●							
8-A	●			●	●	●	●	●		●	●						
8-B	●			●	●	●	●	●		●			●		●		
9-A			●		●			●	●	●	●	●	●		●		
9-B										●							
10				●	●	●	●	●	●	●	●		●			●	
11-A							●	●			●	●				●	
11-B							●	●			●	●				●	
11-C				●		●	●	●			●	●					●
11-D				●		●	●	●	●				●				●

事例番号	連携した関係機関			この事例を好事例と判断した事項							進路先への引継ぎの状況						
	教育機関			保健・医療機関	福祉・労働機関	関係機関の連携	自己理解を促す指導	心理面をサポートする指導・支援	生活面をサポートする指導	保護者との連携	働くことを意識つける指導	その他	個別的教育支援計画		卒業時の情報共有		
	特別支援学校	特別支援学級	通級指導教室										あり	なし	あり	なし	不明
12-A						●			●			●		●			
12-B						●						●		●			
12-C				●	●				●			●		●			

以上が、26 事例の概要である。

これらの事例についてインタビューの内容を整理したところ（事例の詳細は、別冊の「ガイドブック」参照）、課程や学科は異なるものの、共通した課題への対応の工夫が見られた。この工夫は、予備的インタビュー調査でも指摘された「生徒自身の特性への理解不足」と「進路先のイメージの持ちづらさ」に対する工夫である。

1つめの「生徒自身の特性への理解不足」については、障害のある生徒の場合、障害特性を含め、得意・不得意といった自身の特性についての理解が不十分なことが課題であった。この課題は個別性が高く、一斉指導の枠組みでは、十分な対応が難しいことから、通級による指導が行える学校では、通級による指導で、通級による指導が行えない学校では、スクールカウンセラーを活用する等の対応が行われていた。具体的には、自己理解を促すような機会の提供を行うほか、失敗経験が多く自己肯定感が低い生徒に対しては、できることを意識させ、自信を持って取り組めるような機会を増やす等の指導が行われていた。進路について希望を語れることに加え、得意・不得意といった自身の特性についての理解がなければ、進路指導を進めることは難しい。そのため、生徒自身に特性への理解を促す指導等が行われていた。

また、コミュニケーションの課題を有している生徒も多く、これに対応する指導も行われていた。ただし、本人が課題として認識し、改善したいと望まなければ、指導をスタートさせることが難しい。そこで、生徒一人一人の困っている状況を聞き取り、対応する工夫を実践していきながら、コミュニケーションの課題へ対応する指導が進められていた。加えて、進路指導の取組の一つとして、進学や就職の際に必要な面接への対応が挙げられる。コミュニケーション上の課題がある生徒の場合は、この面接への対応が個々の実態に応じて、丁寧に行われていた。

2つめの「進路先のイメージの持ちづらさ」については、就職の場合、卒業後の就労や生活のイメージが持てないこと、進学の場合、大学等での学習や生活のイメージが持てないこと、加えて、大学卒業後の就労や生活のイメージが持てないことが課題であった。この課題に対しては、将来の生活等のイメージを持てるように、オープンキャンパスの利用やインターンシップ等、進路指導の枠組みで指導が行われていた。障害のある生徒の場合、一斉指導だけでは、将来の生活等のイメージが持ちにくい実態がある生徒も多く、個別の対応も行われていた。

また、将来の生活等の中には金銭の管理等の課題もあり、これに対して不安を感じている学校も見られた。生活等に関しては、家庭科による指導での対応が行われていたが、それだけでは十分でない生徒もあり、個別の対応も行われていた。

上記2つの課題解決には、学校だけの取組では限界があり、保護者や関係機関と連携をすることで対応が行われていた。一方、家庭との連携が望めない生徒の場合、進路指導の困難さが顕著になる傾向が見られた。このような生徒の対応には、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、児童相談所、医療機関等との連携が不可欠となり、積極的な連携が進められていた。

一斉指導では、各教科等や学校設定科目等において、合理的配慮を行う等、個別に配慮する等の対応を基本としながらも、高等学校における合理的配慮は、手探りで行われていた。しかし、実際には、他の生徒と異なる対応を希望しない生徒が多く、対応が難しい状況が見られた。

加えて、高等学校の特徴として、教員は、学校の学習上の課題に集中しているため、自己理解の困難さや将来の生活等のイメージの持ちづらさ等は、課題として認識されにくい状況も見られた。障害のある生徒の将来の生活に不安を感じていながらも、本人、保護者の申し出がなければ対応がスタートしにくい面がある。このことに対しては、スクールカウンセラー等の活用が必要となるであろう。

また、障害のある生徒の課題が多く顕在化している学校では、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成した上で、通級による指導の充実を図り、個別の対応を充実させる等の組織的な対応が行われていた。一方で、学校教育としてどこまでやるべきかを議論している学校もあった。今後、高等学校においても一層の特別支援教育の推進が必要であると考えられる。

4. 質問紙調査（本調査）

回収率 32.5%

※有効回答数は、303 件。また、分析ごとに有効回答数は異なる。

（1）回答校の属性

回答校の課程として最も多かったのは「全日制」であり 91.7%、次いで「定時制」が 7.6%、「通信制」が 0.7%であった（図 3-2-8）。

定時制・通信制については少数事例となったが、発達障害等のある生徒の指導・支援の展開を考えるための参考値として紹介する。

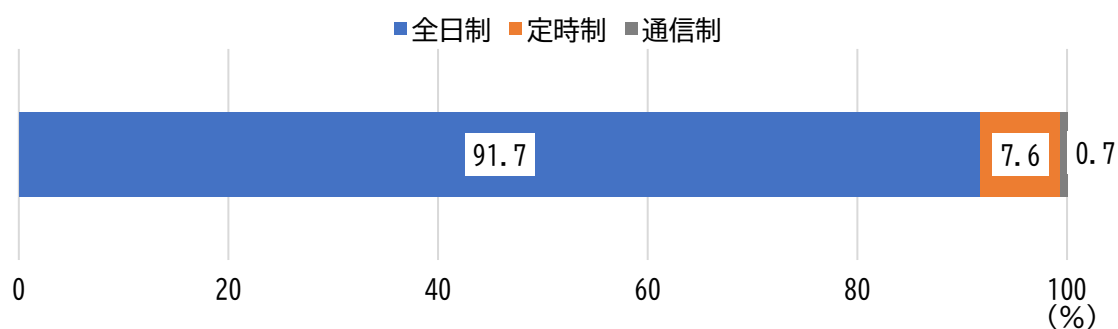


図 3-2-8 課程 (n=303)

回答校の学科として最も多かったのは「普通科」であり 68.8%、次いで「専門学科」が 36.5%、「総合学科」が 13.3%であった（図 3-2-9）。

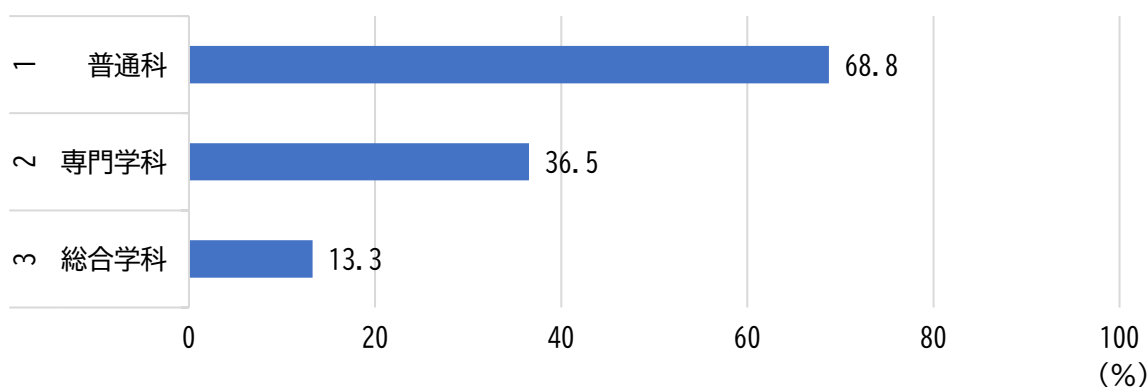


図 3-2-9 学科 (n=301) 複数回答

通級指導教室の設置状況は「なし」が 79.4%、「あり」が 19.3%、「設置予定」が 1.4%であった（図 3-2-10）。

通級指導教室を設置する学校は少数事例となったが、発達障害等のある生徒の指導・支援の展開を考えるための参考値として紹介する。

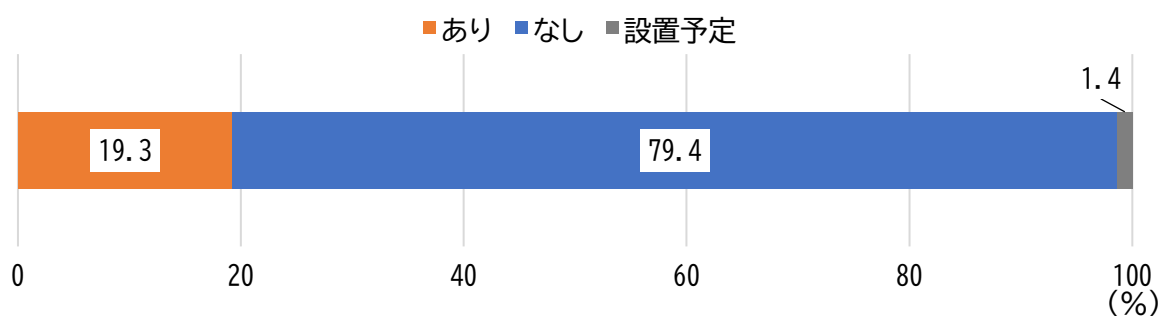


図 3 - 2 - 1 0 通級指導教室の設置状況 (n=296)

(2) 発達障害等のある生徒の進路指導等の状況

以下では、発達障害等のある生徒に対する指導・支援の状況をたずねた結果を示す。全日制の中には普通科、専門学科、総合学科と複数の学科があるが、現状として、専門学科、総合学科を設置する高等学校が少ない上に、本調査のサンプルサイズに偏りが大きく、課程と学科を組み合わせた分析は難しいと判断した。そこで、前述の通り、期待されている実態に基づく解釈のために、課程別に結果を示した。そのため、全日制については全体の傾向として確認されたい。また、定時制・通信制については少数事例のため、参考値として確認されたい。

発達障害等のある生徒に対し取り組んでいる進路指導・支援として、全日制において最も多かったのは「対人コミュニケーション力を高める」であり 81.9%、次いで「自己肯定感を高める」が 72.9%、「自己理解（障害特性を含む）を促す」が 62.5%と続いていた。

定時制・通信制において最も多かったのは「対人コミュニケーション力を高める」「自己肯定感を高める」でありそれぞれ 94.7%、次いで「自己理解（障害特性を含む）を促す」「メンタルの安定（ストレス解消を含む）を図る」がそれぞれ 89.5%、「働くことを意識づける」が 84.2%と続いていた（図 3 - 2 - 1 1）。

実施の割合は異なるものの、全日制、定時制・通信制に共通して、対人コミュニケーション、自己肯定感、自己理解（障害特性を含む）に関する指導・支援が行われていた。

なお、先に紹介したはがき調査（予備調査）と本調査では同一の調査方法をとっていないため厳密な比較はできないが、共通点に着目すると、各指導・支援の内容について、全日制よりも定時制・通信制のほうが実施の割合が高いという状況がうかがえる。一方、差異点に着目すると、はがき調査（予備調査）では「インターンシップの調整」についてたずねており、その実施の割合は全日制で約 1 割、定時制・通信制で約 3 割 5 分となっていた。これに対し、本調査では類似項目として「インターンシップの調整・実施」を設定していたが、その実施状況は、全日制では 3 割 5 分、定時制・通信制では約 8 割という結果となっていた。他の類似項目についても同様に本調査では実施割合が高まっていた。こうした背景として、好事例の把握を目的とした本調査において、指導・支援の実績のある学校から回答を得たこと、また、それゆえに回答校の確保に制約が生じたことが考えられる。

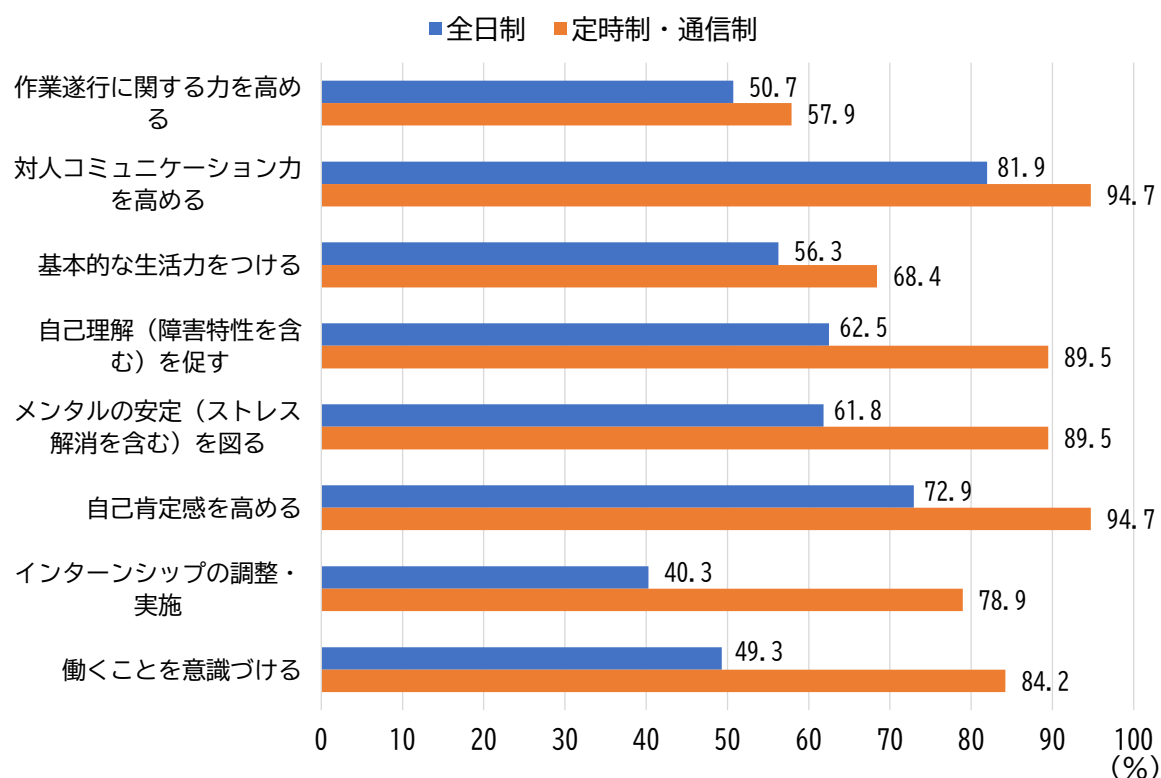


図3-2-11 取り組んでいる指導・支援の内容

(全日制：n=144、定時制・通信制：n=19) 複数回答

以下では、図3-2-11で、発達障害等のある生徒に対し取り組んでいると回答した指導・支援について、どの教科等で実施しているかをたずねた結果を、全日制、定時制・通信制の別に示す。

まず、全日制についての結果を図3-2-12に示す。

以下、回答状況から、選択率が4割を超えるものを取り上げ説明する。

「作業遂行に関する力を高める指導・支援」は、通級指導教室の設置（以下、通級設置）がある場合、「通級による指導」で76.9%選択されていた。また、通級設置を問わず、「各教科（共通する教科）」で70.8%、「総合的な探究の時間」で41.7%選択されていた。専門学科では、「各教科（専門学科で開設の教科）」で78.1%選択されていた。

「対人コミュニケーション力を高める指導・支援」は、通級設置がある場合、「通級による指導」で96.2%選択されていた。また、通級設置を問わず、「各教科（共通する教科）」で55.8%、「総合的な探究の時間」で53.1%、「特別活動」で46.0%選択されていた。

「基本的な生活力をつける指導・支援」は、通級設置がある場合、「通級による指導」で95.0%選択されていた。また、通級設置を問わず、「各教科（共通する教科）」で62.5%、

「特別活動」で 42.5% 選択されていた。

「自己理解（障害特性を含む）を促す指導・支援」は、通級設置がある場合、「通級による指導」で 100% 選択されていた。また、通級設置を問わず、「総合的な探究の時間」で 42.4% 選択されていた。

「メンタルの安定（ストレス解消を含む）を図る指導・支援」は、通級設置がある場合、「通級による指導」で 95.5% 選択されていた。また、通級設置を問わず、「特別活動」で 45.7%、「各教科（共通する教科）」で 44.4% 選択されていた。

「自己肯定感を高める指導・支援」は、通級設置がある場合、「通級による指導」で 100% 選択されていた。また、通級設置を問わず、「特別活動」で 50.5%、「各教科（共通する教科）」で 49.5% 選択されていた。専門学科では、「各教科（専門学科で開設の教科）」で 40.6% 選択されていた。

「インターンシップの調整・実施」は、通級設置を問わず、「総合的な探求の時間」で 66.7%、「各教科（専門学科で開設の教科）」で 46.4% 選択されていた。

「働くことを意識づける指導・支援」は、通級設置がある場合、「通級による指導」で 78.9% 選択されていた。また、通級設置を問わず、「総合的な探究の時間」で 69.0%、「各教科（専門学科で開設の教科）」で 57.1% 選択されていた。

以上の結果から、通級設置がある場合、通級による指導で各指導・支援に取り組んでいることがうかがえる。また、実施割合が上位であった対人コミュニケーション、自己肯定感、自己理解（障害特性を含む）に関する指導・支援は、通級による指導を除くと、どの教科等でも実施割合が突出して高いわけではなく、生徒指導等様々な機会を通じて行われていることが推測される。その他、「作業遂行に関する力を高める指導・支援」は、共通する教科や専門学科で開設の教科の中で行われていること、「基本的な生活力をつける指導・支援」は共通する教科で行われていること、「インターンシップの調整・実施」や「働くことを意識づける指導・支援」は総合的な探求の時間で行われていることがうかがえる。

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2020）によれば、公立高等学校が生徒に企画・実施しているキャリア教育に関する学習の機会や内容として、生徒のキャリア発達を意識した「総合的な探究の時間の授業」は 85.8%、「特別活動（ホームルーム活動など）」は 77.6%、「各教科・科目の授業」は 44.8% となっている。こうした中、本調査を通じ、各教科等において、発達障害等のある生徒に対しどのような指導・支援に取り組める可能性があるかを示すことができたと考える。

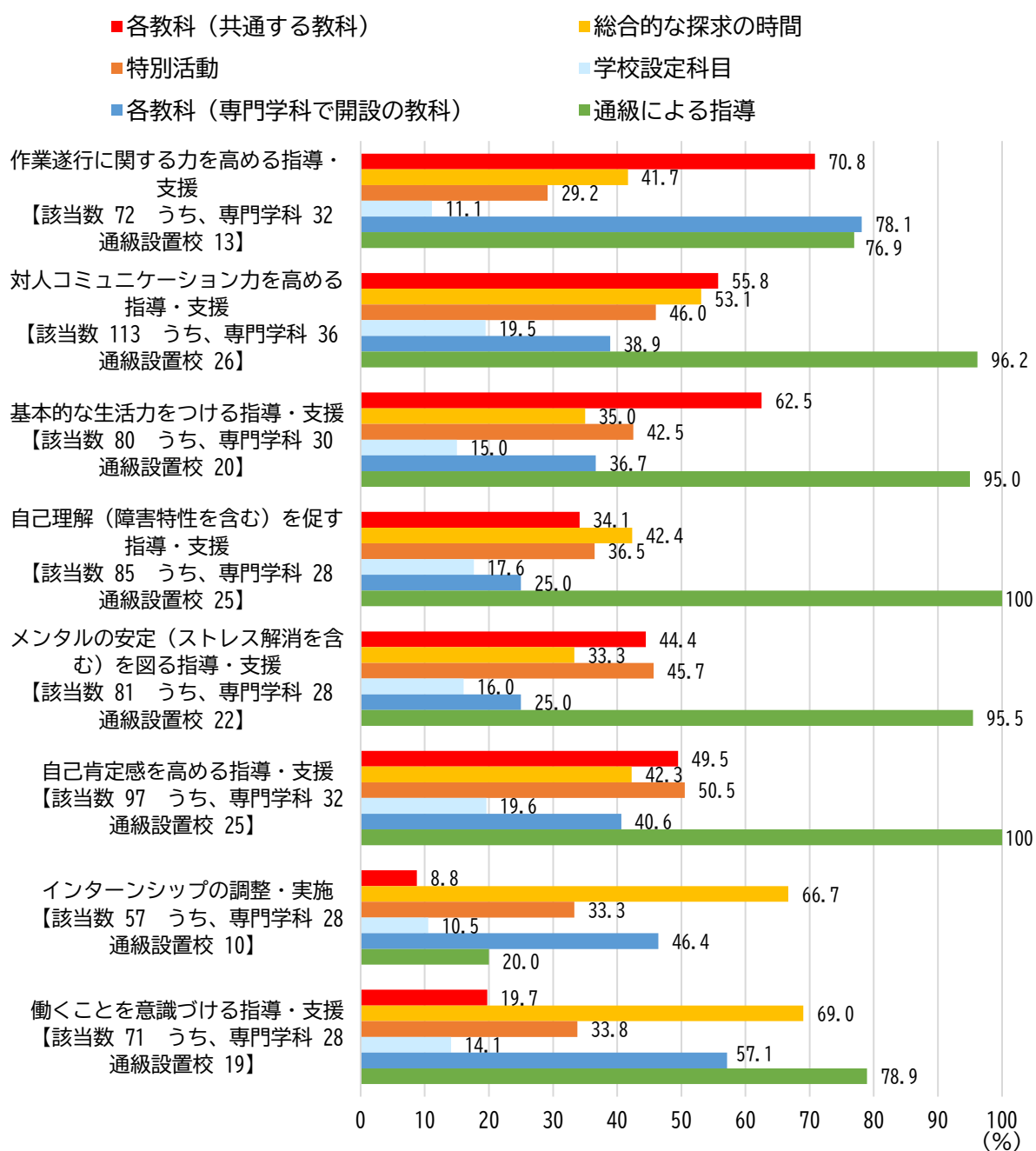


図 3-2-12 指導・支援を実施している教育課程（全日制）複数回答

※該当数：設問への回答に該当する学校数

（各項目内容が取り組んでいる指導・支援として「あてはまる」と回答した学校の数）

※グラフの数値：設問への回答に該当する学校数に占める、回答校の割合

（各項目内容が取り組んでいる指導・支援として「あてはまる」と回答した学校のうち、各教育課程で実施していると回答した学校の割合。ただし、「各教科（専門学科で開設の教科）」の割合は、専門学科と回答した学校のみを対象として算出。また、「通級による指導」の割合は、通級指導教室を設置していると回答した学校のみを対象として算出）

続いて、定時制・通信制についての結果を図3-2-13に示す。

以下、回答状況から、選択率が4割を超えるものを取り上げ説明する。

「作業遂行に関する力を高める指導・支援」は、通級設置がある場合、「通級による指導」で88.9%選択されていた。また、通級設置を問わず、「学校設定科目」で54.5%選択されていた。専門学科では、「各教科（専門学科で開設の教科）」で100%選択されていた。

「対人コミュニケーション力を高める指導・支援」は、通級設置がある場合、「通級による指導」で100%選択されていた。また、通級設置を問わず、「学校設定科目」で44.4%選択されていた。

「基本的な生活力をつける指導・支援」は、通級設置がある場合、「通級による指導」で90.9%選択されていた。

「自己理解（障害特性を含む）を促す指導・支援」は、通級設置がある場合、「通級による指導」で100%選択されていた。また、通級設置を問わず、「総合的な探求の時間」で41.2%選択されていた。

「メンタルの安定（ストレス解消を含む）を図る指導・支援」は、通級設置がある場合、「通級による指導」で100%選択されていた。

「自己肯定感を高める指導・支援」は、通級設置がある場合、「通級による指導」で100%選択されていた。また、通級設置を問わず、「学校設定科目」で44.4%、「各教科（専門学科で開設の教科）」で50.0%選択されていた。

「インターンシップの調整・実施」は、通級設置がある場合、「通級による指導」で58.3%選択されていた。また、通級設置を問わず、「総合的な探求の時間」で40.0%選択されていた。

「働くことを意識づける指導・支援」は、通級設置がある場合、「通級による指導」で75.0%選択されていた。また、通級設置を問わず、「総合的な探究の時間」で50.0%、「各教科（専門学科で開設の教科）」で75.0%選択されていた。

以上の結果から、通級指導教室が設置されている場合、定時制・通信制においても、全日制と同じく、通級による指導で各指導・支援に取り組んでいることがうかがえる。また、実施割合が上位であった対人コミュニケーション、自己肯定感、自己理解（障害特性を含む）に関する指導・支援も、通級による指導を除くと、どの教科等でも実施割合が突出して高いわけではなく、生徒指導等様々な機会を通じて行われていることが推測される。

その他、「作業遂行に関する力を高める指導・支援」は、専門学科で開設の教科や学校設定科目で行われていた。また、定時制・通信制の特徴として、全日制で挙げられていた共通する教科での実施が少なかった点も挙げられる。また、「働くことを意識づける指導」は専門学科で開設の教科や学校設定科目で行われていた。

全体的な傾向を見ると、定時制・通信制は、全日制に比べ、実施割合が高いわけはないが、学校設定科目での実施が比較的行われやすいこと、一方で、共通する教科での実施

は行われにくいことがうかがえる。

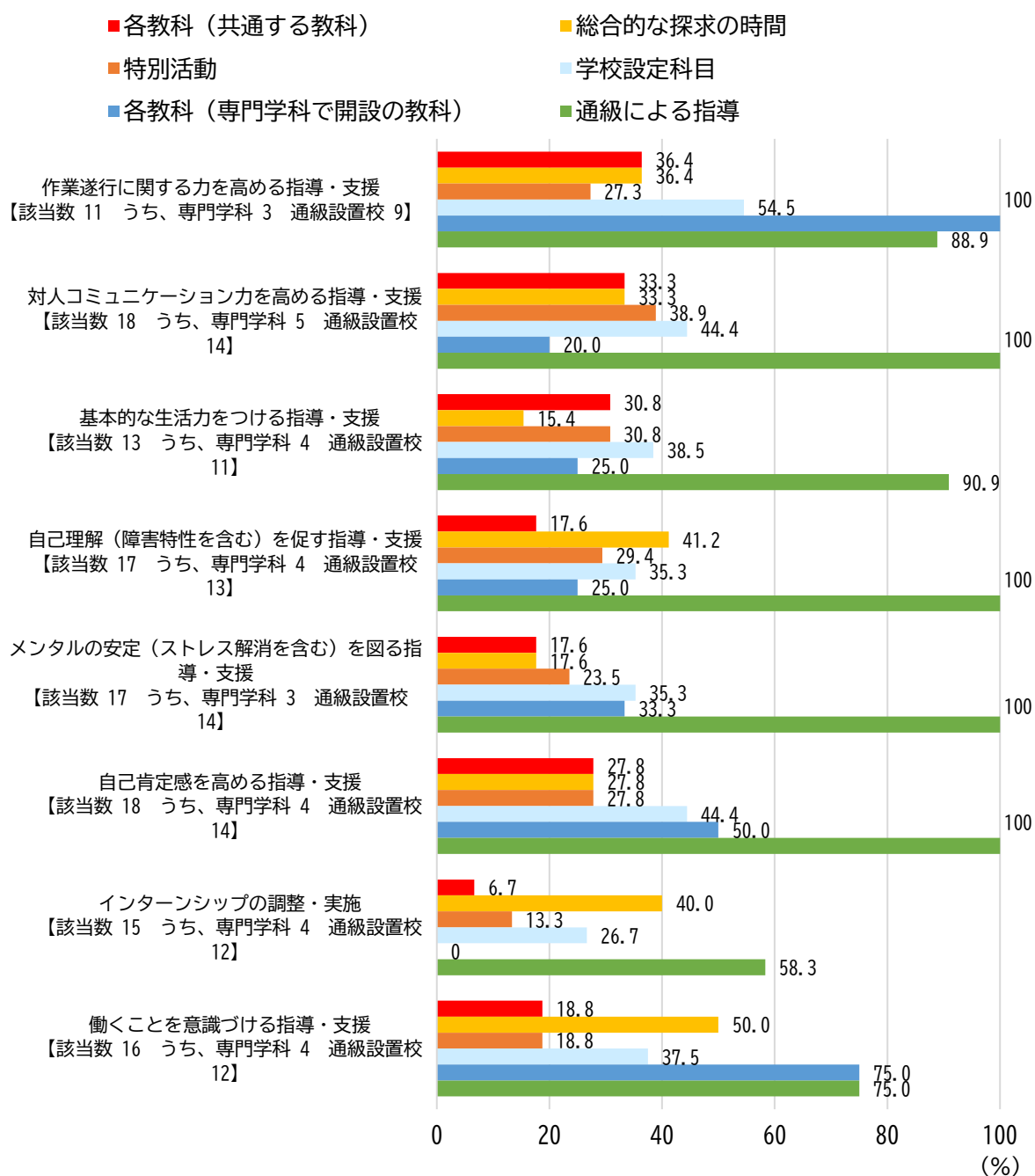


図3-2-13 指導・支援を実施している教育課程（定時制・通信制）複数回答

※該当数：設問への回答に該当する学校数

（各項目内容が取り組んでいる指導・支援として「あてはまる」と回答した学校の数）

※グラフの数値：設問への回答に該当する学校数に占める、回答校の割合

（各項目内容が取り組んでいる指導・支援として「あてはまる」と回答した学校のうち、各教育課程で実施していると回答した学校の割合。ただし、「各教科（専門学科で開設の教科）」の割合は、専門学科と回答した学校のみを対象として算出。また、「通級による指導」の割合は、通級指導教室を設置していると回答した学校のみを対象として算出）

以下では、図3-2-1-1で、発達障害等のある生徒に対し取り組んでいると回答した指導・支援について、自校での指導・支援の困難さから、保護者や関係機関との連携が必要と考えている内容をたずねた結果を、全日制、定時制・通信制の別に示す。

まず、全日制についての結果を図3-2-1-4に示す。

全日制において、発達障害等のある生徒に対し、自校での指導・支援の困難さから「保護者」との連携が必要と考える内容をたずねた。結果、最も多かったのは「基本的な生活力をつける指導・支援」であり75.3%、次いで「メンタルの安定（ストレス解消を含む）を図る指導・支援」が57.3%、「自己理解（障害特性を含む）を促す指導・支援」が48.9%であった。

同じく「関係機関」との連携が必要と考える内容として最も多かったのは「メンタルの安定（ストレス解消を含む）を図る指導・支援」であり53.9%、次いで「自己理解（障害特性を含む）を促す指導・支援」が45.6%、「対人コミュニケーション力を高める指導・支援」が44.1%と続いていた。

「基本的な生活力をつける指導・支援」については保護者に、「メンタルの安定（ストレス解消を含む）」や「自己理解（障害特性を含む）を促す指導・支援」については保護者及び関係機関の双方に連携を期待している様子がうかがえる。

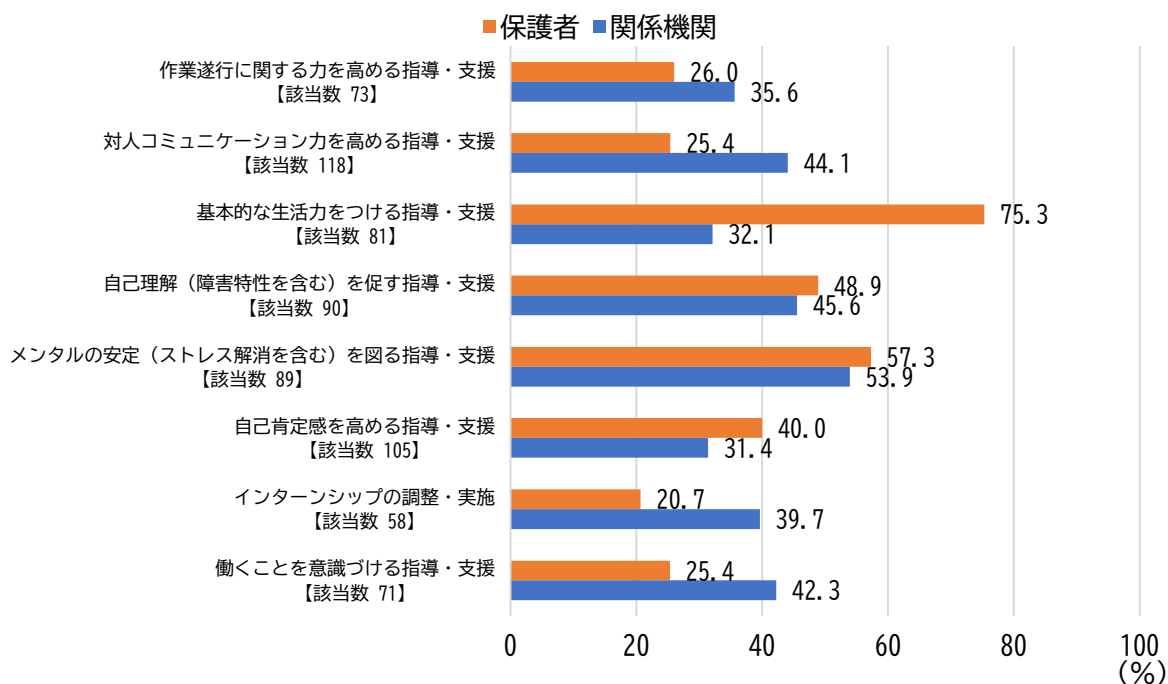


図3-2-1-4 指導・支援の困難さから連携が必要と考える内容（全日制）複数回答

※該当数：設問への回答に該当する学校数
（各項目内容が取り組んでいる指導・支援として「あてはまる」と回答した学校の数）

※グラフの数値：設問への回答に該当する学校数に占める、回答校の割合
（各項目内容が取り組んでいる指導・支援として「あてはまる」と回答した学校のうち、指導・支援に当たり、保護者、関係機関の連携が必要と回答した学校の割合）

続いて、定時制・通信制についての結果を図3-2-15に示す。

以下、回答状況から、選択率が4割を超えるものを取り上げ説明する。

定時制・通信制において、発達障害等のある生徒に対し、自校での指導・支援の困難さから「保護者」との連携が必要と考える内容をたずねた。結果、最も多かったのは「基本的な生活力をつける指導・支援」であり53.8%、次いで「自己理解（障害特性を含む）を促す指導・支援」「メンタルの安定（ストレス解消を含む）を図る指導・支援」がそれぞれ41.2%と続いていた。

同じく「関係機関」との連携が必要と考える内容として最も多かったのは「インターンシップの調整・実施」であり73.3%、次いで「働くことを意識づける指導・支援」が62.5%、「メンタルの安定（ストレス解消を含む）を図る指導・支援」が58.8%、「作業遂行に関する力を高める指導・支援」が54.5%、「自己理解（障害特性を含む）を促す指導・支援」が52.9%、「対人コミュニケーション力を高める指導・支援」が44.4%と続いていた。

定時制・通信制においても、「基本的な生活力をつける指導・支援」については保護者に連携を期待しているが、その割合は全日制と比べれば低い傾向にあった。この背景として、定時制・通信制では前述のとおり、「基本的な生活力をつける」指導・支援が約7割行われていることが関係している可能性がある。

他方、「インターンシップの調整・実施」や「働くことを意識づける指導・支援」については関係機関に連携を期待しており、その割合は全日制と比べ高い傾向にあった。この背景として、回答校における就職希望の生徒の在籍状況が影響していることが考えられる。

なお、「メンタルの安定（ストレス解消を含む）」や「自己理解（障害特性を含む）を促す指導・支援」については、全日制と同様に、保護者及び関係機関の双方に連携を期待している様子が見えてくる。

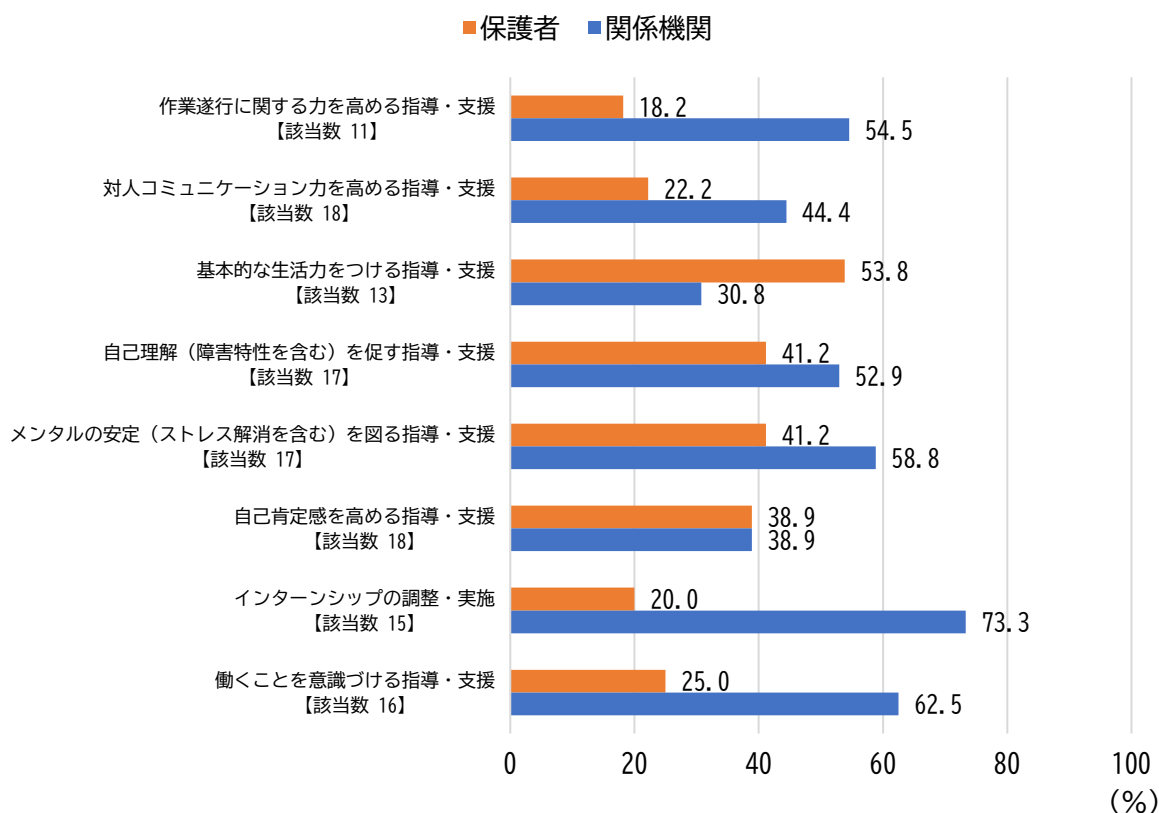


図 3-2-15 指導・支援の困難さから連携が必要と考える内容（定時制・通信制）
複数回答

※該当数：設問への回答に該当する学校の数
（各項目内容が取り組んでいる指導・支援として「あてはまる」と回答した学校の数）

※グラフの数値：設問への回答に該当する学校数に占める、回答校の割合
（各項目内容が取り組んでいる指導・支援として「あてはまる」と回答した学校のうち、指導・支援に当たり、保護者、関係機関の連携が必要と回答した学校の割合）

最後に、自校での指導・支援の困難さから、保護者や関係機関に期待する内容を自由記述でたずね、記述内容を分類した。

結果、「作業遂行に関する力を高める指導・支援」については、「専門職や関係機関との連携・協力」「体験・実習の機会の提供」「保護者（家庭）の理解や協力」「情報共有」などが挙げられていた（表 3-2-6-①）

「対人コミュニケーション力を高める指導・支援」については、「専門職や関係機関との連携・協力」「SSTを学ぶ機会」「体験・実習の機会の提供」「保護者（家庭）の理解や協力」などが挙げられていた（表 3-2-6-②）

「基本的な生活力をつける指導・支援」については、「家庭における自立に向けた取組」「情報共有」「専門職や関係機関との連携・協力」「保護者（家庭）の理解や協力」などが挙げられていた（表 3-2-6-③）

「自己理解（障害特性を含む）を促す指導・支援」については、「専門職や関係機関との連携・協力」「保護者（家庭）の理解や協力」「障害特性及びその支援方法を学ぶ機会」「医療機関の適切な受診」などが挙げられていた（表3-2-6-④）

「メンタルの安定（ストレス解消を含む）を図る指導・支援」については、「専門職や関係機関との連携・協力」「保護者（家庭）の理解や協力」「医療機関の適切な受診と治療」「情報共有」などが挙げられていた（表3-2-6-⑤）

「自己肯定感を高める指導・支援」については、「保護者（家庭）の理解や協力」「専門職や関係機関との連携・協力」「体験・実習の機会の提供」「自己受容を促す支援」などが挙げられていた（表3-2-6-⑥）

「インターンシップの調整・実施」については、「体験・実習の機会の提供」「企業・事業所の協力」「本人と実習先のマッチング」「専門職や関係機関との連携・協力」などが挙げられていた（表3-2-6-⑦）

「働くことを意識づける指導・支援」については、「専門職や関係機関との連携・協力」「保護者（家庭）の理解や協力」「体験・実習の機会の提供」「職業観・勤労観の育成」などが挙げられていた（表3-2-6-⑧）

「保護者への期待」については、「生徒の障害特性についての理解」「家庭における自立に向けた取組」「情報共有」「進路に対する理解」などが挙げられていた（表3-2-6-⑨）

「関係機関への期待」については、「専門的な助言・提案」「支援体制の整備」「進路に関する情報提供」「相互連携」などが挙げられていた（表3-2-6-⑩）

このように、内容によってそれぞれ特徴的な期待が把握される一方、連携・協力や情報共有、保護者の理解・協力といった共通的な期待も把握された。今後はこのような高等学校のニーズを、特別支援学校や福祉・労働機関に周知していく必要がある。

表3-2-6-① 連携への期待：作業遂行に関する力を高める指導・支援（n=31）

カテゴリ	定義	記載例	件数
専門職や関係機関との連携・協力	専門職や就労支援機関、医療機関などの関係機関と連携した支援のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●就労支援事業所と連携している。【定時制・普通科・通級設置校】 ●本県や本市の障害者就労支援（職業）センターとの定期的な連携が必要。【定時制・普通科・通級設置校】 ●医師のアドバイスがほしい。【全日制・普通科】 	12
体験・実習の機会の提供	体験や実習を通し、知識やスキルを身に付けたり、意識の変容を促したりする機会のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●福祉事業所でのアセスメントが体験の機会となっており、働くイメージが持てる。【定時制・普通科・通級設置校】 ●様々な作業が体験できる機会を設定して欲しい。【全日制・専門学科】 ●企業や就労支援施設における職業体験実習等の機会をさらに早い段階から設けていく必要がある。【定時制・普通科】 	9

カテゴリ	定義	記載例	件数
		●体験の場を設定して欲しい。【定時制・総合学科・通級設置校】	
保護者(家庭)の理解や協力	生徒の成長や生活を支えるための保護者による理解や協力のこと	●課題の内容や期限等を周知し、保護者にも声かけの支援をしてほしい。【全日制・普通科】 ●見通しを立て計画性をもち、優先順位を意識した生活のし方についての支援。【全日制・専門学科】 ●関係機関では、苦手なことに対する対処法を指導していただき、保護者には家庭での実践を支援してもらいたい。【全日制・普通科】	8
情報共有	効果的な指導・支援のために学校や関係機関、保護者間で生徒の情報を共有すること	●特性を踏まえ、進路活動につながる指導・支援を共有することで、よりよい効果が期待できる。【全日制・普通科】 ●情報共有することで生徒理解を深める。【全日制・普通科/専門学科】 ●保護者が希望していることや本人の思いを伝えてほしい。【全日制・専門学科】	3
お手伝い等を通じた作業経験	手伝いをすることで得られる作業スキル、コミュニケーション等のスキルのこと	●家庭での手伝いや身の回りのことを行わせてほしい。【全日制・普通科】 ●一役以上の家事設定。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】	2
合理的配慮	障害により生じる困りごとを軽減するために、環境の調整を行うこと	●必要に応じた補助具の利用許可。【全日制・専門学科】	1
その他	上記の項目に該当しないこと	●期限までに成果を出すことを意識させる。【全日制・専門学科】	1

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

表3-2-6-② 連携への期待：対人コミュニケーション力を高める指導・支援
(n=43)

カテゴリ	定義	記載例	件数
専門職や関係機関との連携・協力	専門職や就労支援機関、医療機関などの関係機関と連携した支援のこと	●特別支援学校に相談。【全日制・普通科】 ●専門的な実践方法があれば実施してほしい。【全日制・普通科】 ●コミュニケーションのプロにポイントを教えてもらいたい。【定時制・総合学科・通級設置校】 ●本人の特性をふまえたアドバイス。【全日制・普通科】	14
SSTを学ぶ機会	SSTに関する知識やスキルを身に付けるための学習機会のこと	●社会人として人に迷惑をかけることなく、自分の責務を果たすための、コミュニケーション力の会得。【全日制・専門学科】 ●自分のことを伝える力、相手の話を聞き、覚えたり、理解したりする指導をしてもらいたい。【全日制・普通科】 ●ロールプレイなどを通じてコミュニケーション力を訓練する機会を設けてほしい。【全日制・普通科】	11
体験・実習の機会の提供	体験や実習を通し、知識やスキルを身に付けたり、意識の変容を促したりする機会のこと	●学校外の者に関わる機会を作してほしい。【定時制・普通科・通級設置校】 ●学校外での居場所、人とのかわりの機会。【定時制・普通科・通級設置校】 ●経験できる機会の設定。【全日制・普通科】	10

カテゴリ	定義	記載例	件数
保護者(家庭)の理解や協力	生徒の成長や生活を支えるための保護者による理解や協力のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●保護者の子どもに対する理解、認知。【全日制・専門学科】 ●日常的に機会を得ることが重要なので、家庭でも積極的にコミュニケーションを取ってほしい。【全日制・普通科】 ●子どもとしっかりコミュニケーションとり、日常生活の中で身に付けてほしい。【全日制・総合学科】 	6
情報共有	効果的な指導・支援のために学校や関係機関、保護者間で生徒の情報を共有すること	<ul style="list-style-type: none"> ●情報共有することで生徒理解を深める。【全日制・普通科/専門学科】 ●保護者、教員、関係機関が本人の情報を個別の教育支援計画などで共有し、互いにアドバイスし合いながら一緒に取り組めると良いと思う。【全日制・普通科】 	4
校内連携・配慮(通級含む)	学校内で複数の職員が連携し指導・支援を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ●一般校の生徒も通える通級教室。一般校ではソーシャルスキルトレーニング(個別)などは時間的にきびしいです。【全日制・総合学科】 ●通級指導に関する研修会を通じて。【全日制・普通科・通級設置校】 ●困りごとを表出する声掛け、態度、環境の構築。【全日制・普通科・通級設置校】 	3
その他	上記の項目に該当しないこと	<ul style="list-style-type: none"> ●卒業後の支援。【全日制・普通科】 ●継続的な相談支援。【全日制・普通科/専門学科】 	2

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

表3-2-6-③ 連携への期待：基本的な生活力をつける指導・支援 (n=65)

カテゴリ	定義	記載例	件数
家庭における自立に向けた取組	自立に向けた家庭での取組や学校と連携した支援のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●家庭での声かけ等で習慣化できることも多いと思われる。【全日制・普通科】 ●生理衛生(ひげそり、洗髪)、食事のマナー、買い物など学校では毎回取り組みできないことを教えて欲しい。【定時制・普通科/専門学科・通級設置校】 ●清掃・調理等の機会を作ってほしい。基本的な生活習慣が身につけられるような場面を設定して欲しい。【定時制・普通科・通級設置校】 ●家庭で役割を担うこと。自分のことは自分でする習慣。【定時制・普通科・通級設置校】 	44
情報共有	効果的な指導・支援のために学校や関係機関、保護者間で生徒の情報を共有すること	<ul style="list-style-type: none"> ●基本的生活習慣や家族・家庭での様子をきいたりしている。【全日制・普通科】 ●生活スキルの程度を共有する機会を積極的に持ってほしい。【全日制・普通科】 ●学校と家庭での一貫した支援や対応につながるとよい。【全日制・普通科・通級設置校】 	11
専門職や関係機関との連携・協力	専門職や就労支援機関、医療機関などの関係機関との連携した支援のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●子ども理解のもと、協力(指導・支援)があれば、よりよい効果が期待できる。【全日制・普通科】 ●外部講師を招聘して、保護者の理解が深まる機会がほしい。【全日制・専門学科】 ●ペアレントトレーニングを含めた指導をお願いしたい。【全日制・専門学科】 	9
保護者(家庭)の理解や協力	生徒の成長や生活を支えるための保護者による理解や協力のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●特性の理解と本人の課題をふまえた生活面での支援をしてほしい。【全日制・総合学科・通級設置校】 ●保護者の理解。【全日制・普通科】 	5

カテゴリ	定義	記載例	件数
		●外部講師を招聘して、保護者の理解が深まる機会がほしい。【全日制・専門学科】	
継続的な指導・支援	個々の成長や目標のために持続的に提供される指導・支援のこと	●高校生のため、卒業・進級するために、また、社会に出てからのことも考慮し、支援してもらいたい。【全日制・普通科】 ●入学から卒業まで定期的に通えるような機関を紹介してほしい。【全日制・総合学科】	3
体験・実習の機会の提供	体験や実習を通し、知識やスキルを身に付けたり、意識の変容を促したりする機会のこと	●経験できる機会の設定。【全日制・普通科】 ●失敗しても良いから一人でできる機会の設定。【全日制・普通科・通級設置校】	2

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

表3-2-6-④ 連携への期待：自己理解（障害特性を含む）を促す指導・支援
(n=59)

カテゴリ	定義	記載例	件数
専門職や関係機関との連携・協力	専門職や就労支援機関、医療機関などの関係機関と連携した支援のこと	●学校での指導をする上で専門家による検査や分析を根拠として積極的に活用したい。【全日制・専門学科・通級設置校】 ●客観的な評価を通して適性について検討できるようにして欲しい。【全日制・総合学科】 ●生徒本人の障害受容をうながすとともに、相談する機会をうながしてほしい。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】 ●定期的な個別面談をして専門的見地から助言をしてほしい。【全日制・普通科】	20
保護者(家庭)の理解や協力	生徒の成長や生活を支えるための保護者による理解や協力のこと	●教員も支援できることはやっているが、家庭でのフォローもほしい。【全日制・普通科】 ●本人の自己理解だけでなく、保護者の子に対する障害理解の上で養育していかないと心理的な安定が望めない。【定時制・普通科・通級設置校】 ●家庭の理解があって初めて指導が可能。【全日制・専門学科】 ●できることを任せる環境設定。【全日制・普通科・通級設置校】	18
障害特性及びその支援方法等を学ぶ機会	障害特性やその支援方法等に関する知識や理解を深めるための機会のこと	●生徒への直接的な指導を期待すると共に教員の研修機会としたい。【通信制・普通科】 ●自分の特性を知り、困ったときの対処法を学んでほしい。【全日制・普通科】 ●教員判断による判断だけでは難しい、専門性に基づく支援の方法を知りたいです。【全日制・普通科】 ●自身の得意・不得意を客観的に理解できる機会があると良い。【全日制・専門学科】	9
医療機関の適切な受診	障害理解のために必要に応じて医療機関を受診したり、	●医療機関で受診し、自分の状況を認知してほしい。【全日制・普通科】 ●障害理解を深めてほしい。関係機関(心療内科)に定期的に通ってほしい。【全日制・総合学科・通級設置校】	8

カテゴリ	定義	記載例	件数
	必要な支援を受けること	●特性を有している可能性がある場合、医療機関に介入してもらおうと助かる。【全日制・総合学科】	
継続的な指導・支援	個々の成長や目標のために持続的に提供される指導・支援のこと	●卒業後の支援。【全日制・普通科】 ●幼少時から指導や支援をしてほしい。【全日制・総合学科】	5
情報共有	効果的な指導・支援のために学校や関係機関、保護者間で生徒の情報を共有すること	●普段と違う行動を見せている場合には、連絡してほしい。【全日制・専門学科】 ●保護者の子どもに対する特性の説明。【全日制・専門学科】	4
体験・実習の機会の提供	体験や実習を通し、知識やスキルを身に付けたり、意識の変容を促したりする機会のこと	●企業や就労支援施設における体験実習の機会を多く設けたうえで、実習先からのフィードバックも適切に受けられるような仕組みづくりをする必要がある。【定時制・普通科・通級設置校】 ●自分の特性を知るための講座や、同じ特性を持つ他者との交流の機会を設けてほしい。【全日制・普通科】	4
その他	上記の項目に該当しないこと	●障害特性をなかなか認められない保護者もあり、特性理解へのハードルを下げるための環境を整えてほしい。【全日制・普通科】	1

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

表3-2-6-⑤ 連携への期待：メンタルの安定（ストレス解消を含む）を図る指導・支援（n=72）

カテゴリ	定義	記載例	件数
専門職や関係機関との連携・協力	専門職や就労支援機関、医療機関などの関係機関と連携した支援のこと	●医療の面から専門的な説明をする機会を設けてほしい。【全日制・普通科】 ●トラブル対処へのアドバイス。【全日制・普通科】 ●療育機関・主治医・スクールカウンセラーによる助言。【全日制・普通科】 ●スクールカウンセラーとの面談（現在は月に1, 2回）が、いつでもできるとよい。【全日制・専門学科/総合学科】	24
保護者(家庭)の理解や協力	生徒の成長や生活を支えるための保護者による理解や協力のこと	●家庭でほめてほしい。【全日制・普通科】 ●二次障害にならないよう、子どもの特性の理解と素早い対応を実施して欲しい。【定時制・普通科・通級設置校】 ●パニックになることなく、安定した生活を送るために、話しあっていただきたい。【全日制・普通科】 ●学校では言えない不安や不満を聞き取ってほしい。【全日制・普通科】	19
医療機関の適切な受診と治療	精神の安定を図るために医療機関を適切に受診したり服薬による治療を受けたりすること	●家庭、場合によっては病院での適切な対応が不可欠と思われる。【全日制・普通科】 ●定期通院・服薬等のサポート。【全日制・普通科/専門学科】 ●必要に応じて、服薬しながら気持ちの波を最小限にしたい。【全日制・普通科】	10

カテゴリ	定義	記載例	件数
情報共有	効果的な指導・支援のために学校や関係機関、保護者間で生徒の情報を共有すること	<ul style="list-style-type: none"> ●家庭においても取り組んでいただき、課題を共有することで、よりよい効果が期待できる。【全日制・普通科】 ●通院中の心療内科に対して、極端な自己否定の緩和、学校との情報共有等をしてほしい。【全日制・総合学科・通級設置校】 ●学級担任・教育相談係(特別支援コーディネーター)・スクールカウンセラーとの面談を定期的実施。【全日制・普通科】 	8
カウンセリング	スクールカウンセラー等の専門家によるサポートやアドバイスのこと	<ul style="list-style-type: none"> ●スクールカウンセラーに相談することで精神的に安定した生活を送ってほしい。【全日制・普通科】 ●スクールカウンセラーを利用し、専門的なアドバイスを教員がもらったり、生徒がカウンセリングを利用した。【全日制・専門学科】 ●カウンセリング等の実施をしてほしい。【全日制・専門学科】 	6
体験・実習の機会の提供	体験や実習を通し、知識やスキルを身に付けたり、意識の変容を促したりする機会のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●体験の機会の設定。【全日制・普通科】 ●経験できる機会の設定。【全日制・普通科】 ●居場所や楽しい活動の場をもち、気持ちの安定につながるようになる。【全日制・普通科】 	6
障害特性や支援方法等を学ぶ機会	障害特性やその支援方法に関する知識や理解を深める機会のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●外部講師を招聘して、生徒たちの理解が深まる機会がほしい。【全日制・専門学科】 ●精神的に不安定になった際の対応の仕方を指導していただきたい。【全日制・普通科・通級設置校】 ●自分の特性を知るための講座や、同じ特性を持つ他者との交流の機会を設けてほしい。【全日制・普通科】 	5
継続的な指導・支援	個々の成長や目標のために持続的に提供される指導・支援のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●卒業後に困った時に相談できる関係機関を生徒が在学中から周知できるとありがたい。【全日制・専門学科・通級設置校】 ●家庭での幼い頃からの指導。【全日制・専門学科】 	4
その他	上記の項目に該当しないこと	<ul style="list-style-type: none"> ●担任の先生と相談しやすい環境づくり。【全日制・専門学科】 	1

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

表3-2-6-⑥ 連携への期待：自己肯定感を高める指導・支援 (n=40)

カテゴリ	定義	記載例	件数
保護者(家庭)の理解や協力	生徒の成長や生活を支えるための保護者による理解や協力のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●本人の特性を理解し、安心して過ごせる関係づくり。【定時制・総合学科・通級設置校】 ●家庭で役割などを与え、自己肯定感を高めてほしい。【全日制・普通科・通級設置校】 ●保護者の適切な関わりは自己肯定感を高めることに極めて重要であると考え。【全日制・普通科】 	12
専門職や関係機関との連携・協力	専門職や就労支援機関、医療機関などの関係機関と連携した支援のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●本校でも色々な取り組みをしているが、限界があり、家庭や外部機関と連携している。【定時制・専門学科】 ●個別面談を通じて、専門的に支援してもらいたい。【全日制・普通科】 ●スクールカウンセラーの配置を増やす。【全日制・専門学科/総合学科】 	10

カテゴリ	定義	記載例	件数
体験・実習の機会の提供	体験や実習を通し、知識やスキルを身に付けたり、意識の変容を促したりする機会のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●好きなことに取り組める機会。家庭での役割。【定時制・普通科・通級設置校】 ●学校以外での成功体験の機会をつくってほしい。【全日制・普通科】 ●インターンシップ受入れ企業。【全日制・専門学科】 	8
自己受容を促す支援	自分の強みや弱みを理解し、自己を受け入れていく過程を支えること	<ul style="list-style-type: none"> ●学校生活や提案の中で「できない」ことばかりに意識がむいてしまわないようにしてあげたい。【全日制・普通科】 ●家庭において、他者と比べるのではなく、褒める機会を増やして欲しい。【定時制・普通科・通級設置校】 ●場面に応じてだが、本人を肯定する機会を増やしてほしい。【全日制・専門学科/総合学科・通級設置校】 	7
情報共有	効果的な指導・支援のために学校や関係機関、保護者間で生徒の情報を共有すること	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒への声掛けについて、方針を共有したい。【全日制・普通科/専門学科】 ●専門家の意見や情報が入手できるので、チームとしての対応につながる。【全日制・専門学科】 ●学習・学校の様子、結果に対する評価。【全日制・普通科・通級設置校】 	6
その他	上記の項目に該当しないこと	<ul style="list-style-type: none"> ●卒業後の支援。【全日制・普通科】 	1

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

表3-2-6-⑦ 連携への期待：インターンシップの調整・実施 (n=40)

カテゴリ	定義	記載例	件数
体験・実習の機会の提供	体験や実習を通し、知識やスキルを身に付けたり、意識の変容を促したりする機会のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●一般企業でのインターンシップの機会。【定時制・普通科・通級設置校】 ●理解のある職場を探ることができる。【全日制・専門学科】 ●具体的な体験の機会を設定して欲しい。【全日制・普通科】 ●希望する進路先の見学ではなく、体験が必要。【全日制・普通科】 	11
企業・事業所の協力	企業・事業所によるインターンシップや実習の受入れ、体験の機会の提供等に関する事	<ul style="list-style-type: none"> ●まずは受け入れて、適性を判断して欲しい。【全日制・総合学科】 ●障害を有する生徒に対する柔軟な受入れ。【全日制・専門学科】 ●成功体験を積めるように、具体的な指示を出してほしい。【全日制・普通科・通級設置校】 	8
本人と実習先のマッチング	生徒の特性や得意・不得意に応じた実習先を選定すること	<ul style="list-style-type: none"> ●障害特性に応じた企業を紹介して欲しい。【定時制・普通科/専門学科・通級設置校】 ●特性に応じた職種の多様性があることを知らせる。【全日制・専門学科】 ●生徒の得意な点が活かせるように支援をしてほしい。【全日制・総合学科】 	7
専門職や関係機関との連携・協力の連携	専門職や就労支援機関、医療機関などの関係機関と連携した支援のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●普通科の高校において、障害を抱える生徒のインターンシップ実施はまだまだ定着しておらず、外部機関の助言や支援が必要。【定時制・普通科・通級設置校】 ●事業所との調整・巡回指導。【全日制・総合学科・通級設置校】 	6

カテゴリ	定義	記載例	件数
情報共有	効果的な指導・支援のために学校や関係機関、保護者間で生徒の情報を共有すること	<ul style="list-style-type: none"> ●本人の特徴をふまえて、事故等にあわないように事前の十分な打合せが必要である。【全日制・専門学科・通級設置校】 ●福祉的な就労を検討する場合には、保護者と進路先とも密な連絡を取ってほしい。【全日制・普通科・通級設置校】 	5
情報提供	必要な情報を得たり、共有したりすること	<ul style="list-style-type: none"> ●見学会、合同説明会などを設定して欲しい。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】 ●インターンシップの受け入れが可能かどうか、企業の一覧を作成して欲しい。【定時制・普通科・通級設置校】 ●適切な実習先と実習内容の提案・紹介。【全日制・専門学科・通級設置予定】 	4
その他	上記の項目に該当しないこと	<ul style="list-style-type: none"> ●普通科の高校では、なかなか実施をすることが難しい。【全日制・普通科】 ●実施のノウハウ、福祉課やハローワークとの連携を指導できる専門知識がほしい。【定時制・総合学科・通級設置校】 ●勤労観の醸成。【全日制・普通科/専門学科】 	3

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

表3-2-6-⑧ 連携への期待：働くことを意識づける指導・支援 (n=36)

カテゴリ	定義	記載例	件数
専門職や関係機関との連携・協力	専門職や就労支援機関、医療機関などの関係機関と連携した支援のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●ハローワークなどの外部機関による保護者および生徒への面談等の機会。【全日制・普通科】 ●学校とは異なる視点からの助言を望む。【定時制・総合学科・通級設置校】 ●就労支援(サポートステーション)施設に赴き、施設の方との面談を実施。【全日制・普通科】 	11
保護者(家庭)の理解や協力	生徒の成長や生活を支えるための保護者による理解や協力のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●面談だけでは、働くことへの意識づけは不十分。家庭でもよく話し合っていたきたい。【全日制・普通科】 ●どのような仕事に向いているか、本人が知っていく上で協力が必要。【全日制・普通科・通級設置校】 ●家庭で役割を担うこと。定額の小遣い制。【定時制・普通科・通級設置校】 	10
体験・実習の機会の提供	体験や実習を通し、知識やスキルを身に付けたり、意識の変容を促したりする機会のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●インターンシップの実施。【全日制・専門学科】 ●理解ある高校生のアルバイト雇用と余暇活動の場の確保。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】 ●職場体験実習を通して、働くことの大変さとやりがいを感じてほしい。【全日制・普通科・通級設置校】 	9
職業観・勤労観の育成	生徒の職業観・勤労観を育み、進路選択を支えること	<ul style="list-style-type: none"> ●障害特性を踏まえた「働くことを意識づける指導・支援」の必要性を感じている。【全日制・普通科】 ●勤労観の醸成。【全日制・普通科/専門学科】 ●普通科高校での学びの先(大学等へ進学し、就職する)のイメージがもてるような機会があるとよい。【全日制・普通科】 	6
情報提供	必要な情報を得たり、共有したりすること	<ul style="list-style-type: none"> ●就労支援事業所から具体的な内容を知る機会を作りたい。【全日制・総合学科・通級設置校】 ●どのような職種、待遇があるかの情報提供があればいいと思う。【全日制・専門学科】 	4

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

表3-2-6-⑨ 連携への期待：保護者への期待 (n=28)

カテゴリ	定義	記載例	件数
生徒の障害特性についての理解	生徒の障害特性について理解を深め、受け入れていく過程のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●子どもの現状を理解しようとする、または受け入れる姿勢が高まってほしい。【全日制・専門学科】 ●保護者、本人が障害受容が出来ていると支援しやすい。本人が知らない状況も多い。【全日制・普通科】 ●本人の特性の受け入れや理解。それがあってこそ本人の能力も伸びると思う。【全日制・普通科】 	13
家庭における自立に向けた取組	自立に向けた家庭での取組や学校と連携した支援のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●10年後、20年後、30年後を一緒に考えること。【定時制・普通科・通級設置校】 ●子どもとコミュニケーションを図り、コミュニケーションスキルを高めて欲しい。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】 ●親亡き後に自立した生活を送ることを想定して、子どもと話をしてほしい。【全日制・普通科・通級設置校】 	7
情報共有	効果的な指導・支援のために学校や関係機関、保護者間で生徒の情報を共有すること	<ul style="list-style-type: none"> ●学校との情報共有。【全日制・普通科】 ●障害の状態を詳しく教えてほしい。【全日制・普通科】 ●学校との密なコミュニケーション。【全日制・普通科/専門学科】 	6
進路に対する理解	将来の進路、職業や方向性についての理解に関すること	<ul style="list-style-type: none"> ●学校での様子や学習能力を把握・理解し、社会で適切な支援を受けて生活できる進路を選択して欲しい。【全日制・専門学科】 ●子供の特性を知る。進路に当たっては任せきりや否定ばかりではない態度で関わって欲しい。【全日制・専門学科】 ●本人の困り感を受容し進学や就労のサポートを行う。【全日制・普通科】 	5
早期支援	早期支援に向けた受診や療育、適切なかわりに関すること	<ul style="list-style-type: none"> ●子供の特性を理解し、早い段階から療育が受けられるようにして欲しい。【定時制・普通科・通級設置校】 ●早期の障害受容、支援の相談。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】 	4
見守り・寄り添い	生徒に寄り添い、見守る支援を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ●本人に寄り添い、認めてあげてほしい。【定時制・専門学科】 ●障害受容は難しいが、一般と比較しない声掛けと環境設定。【全日制・普通科・通級設置校】 	3
その他	上記の項目に該当しないこと	<ul style="list-style-type: none"> ●保護者に指導支援を求めるものではない。【全日制・専門学科】 ●もう十分にやってくださっていることが多い。【全日制・専門学科】 	2

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

表3-2-6-⑩ 連携への期待：関係機関への期待 (n=26)

カテゴリ	定義	記載例	件数
専門的な助言・提案	専門知識に基づいて提供されるアドバイスのこと	<ul style="list-style-type: none"> ●該当生徒に対する積極的な支援策の提供。【定時制・普通科・通級設置校】 ●保護者や本人が他機関と連絡したくなるような気持ちにもっていく。【全日制・専門学科】 ●学校と家庭とのパイプ役となり、専門的なアドバイスを 	12

カテゴリ	定義	記載例	件数
		してほしい。【全日制・普通科】 ●本人の実態に合った進路実現に向けた助言をいただきたい。【全日制・普通科・通級設置校】	
支援体制の整備	効果的な指導・支援のために連携体制を整備していくこと	●スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの配置をして、丁寧な生徒理解と支援を検討したい。【全日制・専門学科/総合学科】 ●もっと高校と連携が取れる機関がほしい。【全日制・専門学科】 ●専門の職員が必要。【課程・学科未回答】	5
進路に関する情報提供	将来の進路、職業や就職先についての情報を提供すること	●ハローワーク等の公的機関における障害者雇用の手続きや現状について、特別支援学校以外の教職員が知る機会を設定してほしい。【全日制・総合学科・通級設置校】 ●進路に関する研修を設定してもらいたい。【全日制・普通科】 ●希望する進路が、客観的に見て本人の適性に合わないことが多い。または、進路決定できない。自分にあった進路先や就職先の選択肢を与えて欲しい。【全日制・普通科】	4
相互連携	それぞれの組織が共通の目標や課題に向けて連携すること	●地域コーディネーター等による障害者職業センターなどへの紹介。【全日制・普通科】 ●特性を有する生徒の進路を考えるうえでは、関係機関とさらに連携を深めていきたいと考えている。【定時制・普通科・通級設置校】 ●在学中から、就労に向けた共働での取り組みができればありがたい。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】	4
生徒への支援	生徒に合わせた形で提供される支援のこと	●頑張っても出来ないことは、努力して出来るところまでで終わらせる。【定時制・専門学科】 ●就労に向けたサポート。【全日制・専門学科・通級設置予定】 ●本人の意識付け・今後の就労支援・就労の定着。【全日制・普通科】	4
その他	上記の項目に該当しないこと	●特別支援の専門知識を持つ教員が少ないため、適切な支援ができていないか不安がある。【全日制・専門学科】	1

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

(3) 発達障害等のある生徒の進路指導等に関する好事例

以下の回答は、在籍していた発達障害のある、または発達障害があると思われる生徒から任意で1名選び、指導・支援の状況をたずねた結果である。

①生徒の属性

生徒の発達障害の種別として最も多かったのは「ASD」であり 46.7%、次いで「ADHD」が 40.0%、「LD」が 13.3%であった（図 3-2-16）。

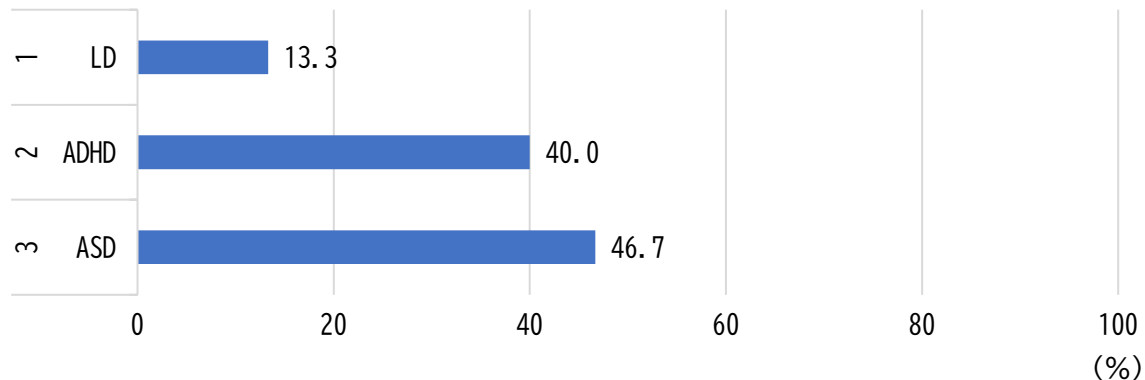


図 3-2-16 回答する生徒の発達障害の種別 (n=180)

生徒の「発達障害の診断・判定、障害者手帳の取得、特性への気づき」の状況として最も多かったのは「診断・判定あり／障害者手帳なし」であり 40.8%、次いで「診断・判定あり／障害者手帳あり」が 33.9%、「診断・判定なし／本人の障害特性への気づきあり」が 9.8%と続いていた（図 3-2-17）。

好事例として選定された事例では、診断・判定がある生徒が 7 割以上、また、障害者手帳を有する生徒も 3 割以上という結果であった。

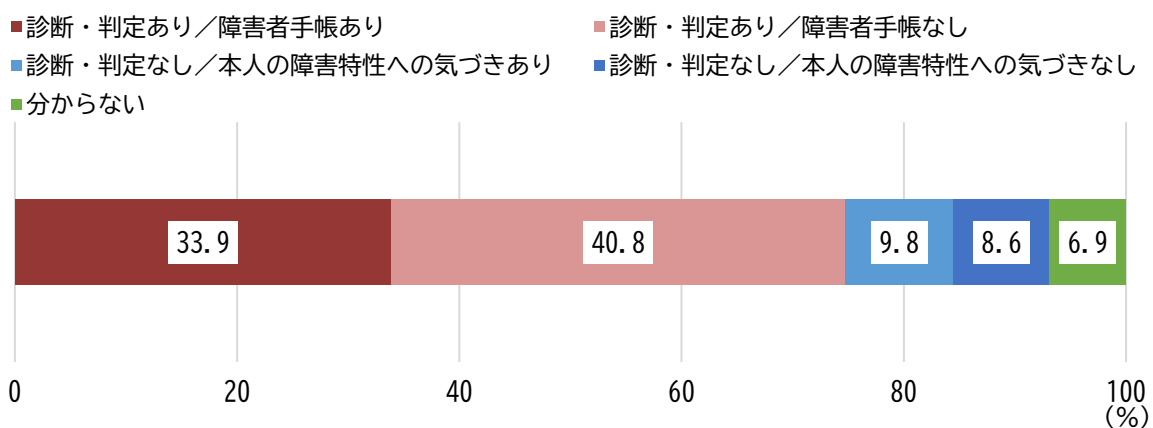


図 3-2-17 回答する生徒の発達障害の診断・判定、障害者手帳の取得、障害への気づきの状況 (n=174)

また、生徒の「障害者手帳の種別」は、「精神障害者保健福祉手帳」が 73.2%、「療育手帳」が 36.6%であった（図 3-2-18）。

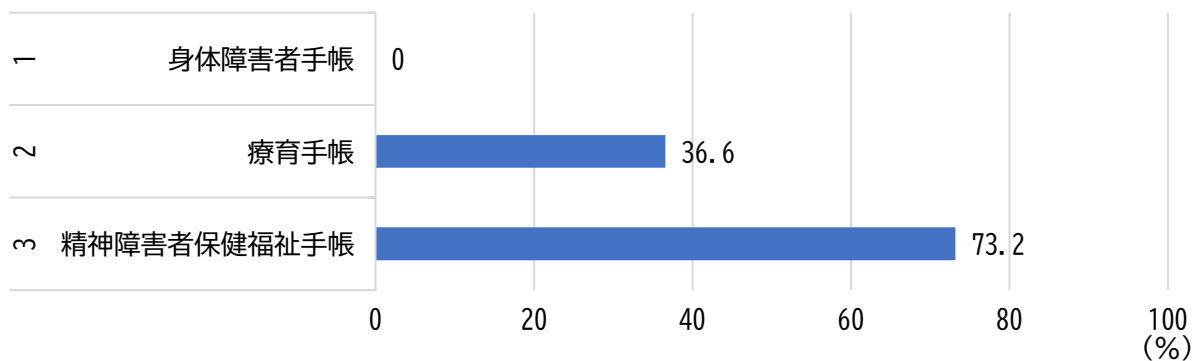
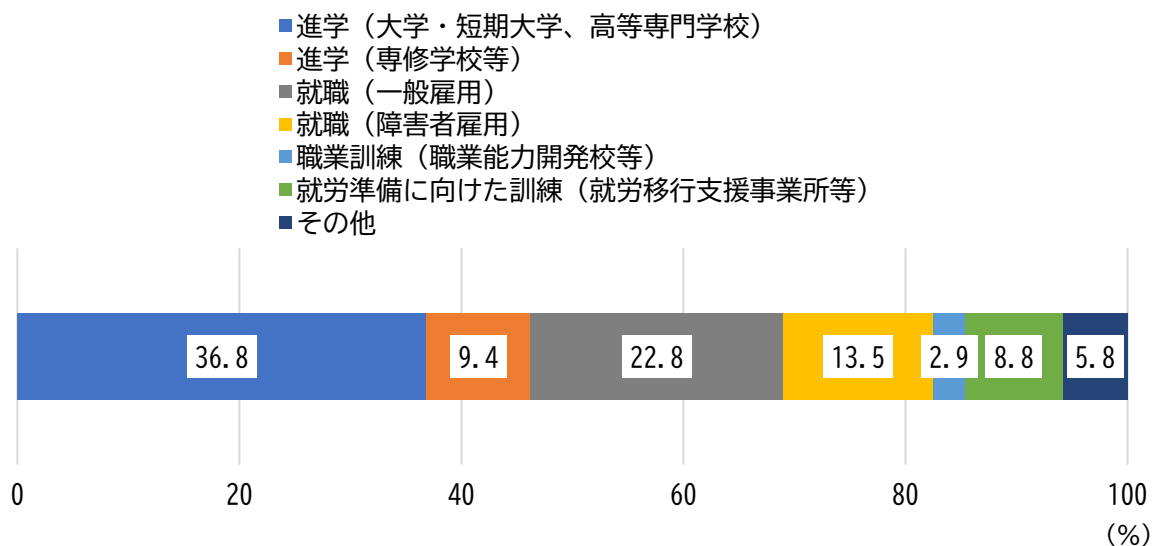


図 3-2-18 回答する生徒の障害者手帳の種別 (n=41) 複数回答

参考までに、生徒の「進路先」をたずねたところ、「進学（大学・短期大学、高等専門学校）」が 36.8%、「就職（一般雇用）」が 22.8%、「就職（障害者雇用）」が 13.5%であった（図 3-2-19）。

生徒の進路先は、46.2%が進学、36.3%が就職であり、職業訓練などの移行期間を経ずに就職を選択する生徒も一定数いることが把握された。

図 3-2-19 回答する生徒の進路先 (n=179)



以下では、選定した事例に対し、「自己理解を促しながら、進路先決定に向けて行った指導・支援」「自立と社会参加に向けた指導・支援」「連携による支援（保護者との連携、関係機関との連携）」をそれぞれどのように進めたかを自由記述でたずねた結果を示す。

②進路先決定に向けた指導・支援

自己理解を促しながら、進路先決定に向けて行った指導・支援内容を自由記述でたず

ね、記述内容を分類した。結果、「生徒の希望や特性に寄り添った進路指導」「専門職や関係機関との連携・協力」「校内連携・配慮」「社会的スキルを高める指導・支援」などが挙げられていた（表3-2-7-①）。

また、自己理解を促す指導・支援以外で、進路先決定に向けて行った指導・支援内容を自由記述でたずね、記述内容を分類した。結果、「生徒の希望や特性に寄り添った進路指導」「専門職や関係機関との連携・協力」「体験・実習を通じた指導・支援」「情報共有」などが挙げられていた（表3-2-7-②）。

社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現する上で、自己理解及び、これに基づく意思決定は重要な要因となる。こうした中、関係機関や保護者と連携したり、通級による指導も活用したりしながら、生徒の特性に応じて必要なスキルを高めたり、体験的な学びの場を設定するなどの工夫を行ったりしている様子が見えてくる。

表3-2-7-① 自己理解を促しながら、進路先決定に向けて行った指導・支援

(n=105)

カテゴリ	定義	記載例	件数
生徒の希望や特性に寄り添った進路指導	生徒の進路希望や強み・弱み等を考慮し進路に関する指導・支援を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ●あらゆることを抱え込み過ぎてしまう傾向があったため、自分の得意分野を把握させ、芸術系の進路に向けた個別指導を行った。【全日制・普通科】 ●生徒は学習面において座学で一定時間内に多くの作業を同時にすることや書字が苦手な状況にあったため、将来は身体を動かし、手に職をつける仕事に従事できることを目的に進学先の決定の助言をした。【全日制・普通科】 ●自分が納得できる進路選択ができるように、話し合いの機会を多く持った。【全日制・専門学科/総合学科・通級設置校】 	61
専門職や関係機関との連携・協力	専門職や就労支援機関、医療機関などの関係機関と連携した支援のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●県から派遣されている就職コーディネーターに力になってもらった。【全日制・専門学科】 ●感情を抑え切れず、他者に対して攻撃的になることも多かったため、週1回は必ず支援員、もしくは校内コーディネーターと、行動の振り返りを行っていた。自己の障害については理解はしていたが、カッとなると抑え切れなかったため、その振り返りで少しずつ改善していった。【全日制・普通科】 ●生徒が働くイメージを持ちにくく、就労希望企業を具体的に考えることができなかったため、ハローワークで職業評価を受けさせ、自らの適性を考えるきっかけ作りを設定した。【全日制・専門学科・通級設置校】 ●発達障害者支援センターと定期的に相談活動を行い、学校と地域の障害者就業・生活支援センター、障害者就労支援機関や、行政の障害者支援基幹センターと連携協議し、障害者移行就労支援センターで自己理解や進路適応のトレーニングを行い、一般就職を目指した。【全日制・普通科/専門学科】 	41

カテゴリ	定義	記載例	件数
校内連携・配慮	学校内で関係者が連携・協力し、生徒のニーズに配慮したかかわりや指導・支援を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ●周りの生徒が受けいれる体制作りが必要。【全日制・普通科】 ●生徒は、こだわりが強く、感情をコントロールできないときがあったため、担任をはじめ多くの教員が障害について理解し、問題があったらじっくり話をきいてあげるなどの支援を行った。【全日制・普通科/専門学科】 ●課題の提出期限を守ることや遅刻しない等の指導には、うまくのれないことについて、教員間で追いつめない加減で対応し、本人が充実した学校生活を送れるよう見守った。【全日制】 	31
社会的スキルを高める指導・支援	他者とのコミュニケーションや状況に応じた行動など、社会的スキルを高める指導・支援を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒は、クラス内において対人コミュニケーションが苦手で、東京都のコミュニケーションアシスト講座に参加した。【全日制・普通科】 ●個別ではなく、全体への SST を実施【全日制】 ●自分について伝えることが苦手だったので、自分をゲームのキャラクターとして設定してもらい、スキルやウィークポイント、レベルアップ装備などについてユーモアを持って考えることから始めて自己理解を進め、得意・不得意・興味・関心を確認していった。【全日制・総合学科・通級設置校】 	24
保護者(家庭)の理解や協力	生徒の成長や生活を支えるための保護者による理解や協力のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒は ASD であり、知的能力においても低い状況であった。進路先決定に向けて支援するために保護者と連携することを目指した。具体的には、「進路講座(課外活動)」への参加を促し、同伴している保護者と関係性を築いた。【通信制・普通科】 ●生徒は新しい環境に慣れることに時間がかかることや周囲の理解と協力や声かけが必要であるため、大学進学に向けて担任を中心に本人に適した進路先について本人・保護者と面談を重ね受験校を決定した。【全日制・普通科】 ●生徒は、児童福祉施設で生活支援を受けていたため、施設長さんが保護者であり、施設職員の方々が退所後の自立支援に向けて対応して下さった。【全日制・普通科/専門学科】 	22
通級による指導	通級指導教室において、障害による学習上または生活上の困難を改善・克服することを目的とする指導(自立活動に相当する内容)を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ●1人暮らしが必要な進路先であった為、生活が1人でできることをまず目標に通級やキャリア教育等で支援した。【全日制・総合学科】 ●生徒は、職業に関する知識が不足し、独りよがりの解釈をする傾向があった。通級による指導で、自分に合った職業について知ることを目的に、職業について調べる学習を行った。具体的には、インターネットや本で資格の取り方や仕事の内容を調べ、その内容を教師と確認することで自分に合っているか検討することができた。【定時制・普通科・通級設置校】 ●通級指導を受けることによって自己理解が進み、自分ができそうな仕事と、そうでない仕事について考えられるようになり、進路先を決定することができた。【全日制・専門学科・通級設置校】 	17
情報共有	効果的な指導・支援のために学校や関係機関、保護者間で生徒の情報を共有すること	<ul style="list-style-type: none"> ●ハローワーク担当者と生徒(家族)、学校の三者による面談。【全日制・専門学科】 ●普段より生活や授業の様子を観察して、教職員や保護者と情報共有をした。日々の振り返りを行うことで、自分ではできていたつもりのことでも、十分ではないことがあると指摘し、本人の努力は認めながら自己理解に繋がった。【全日制・専門学科】 	13

カテゴリ	定義	記載例	件数
		●担任と生徒との面談や進路指導部との面談を実施し、高校卒業後の進路について具体的な指導・助言を行った。【全日制・総合学科】	
体験・実習を通じた指導・支援	体験や実習を通し、知識やスキルを身に付けたり、意識の変容を促したりする指導・支援を行うこと	●生徒が希望進路・職業への適性を理解するために、職業調べやインターンシップ等を行った。【全日制・普通科】 ●事例生徒は当初、一般就労を希望していたが、作業遂行に関する力やコミュニケーション力、基本的な生活力、自己理解等が十分ではない状況であったため、自己理解を促し、職業能力と生活力の向上を目指して、就労継続支援A型事業所及び就労継続支援B型事業所でのインターンシップ、宿泊型自立訓練事業所での宿泊体験を行った。【全日制・普通科・通級設置校】 ●一般企業への就職を希望していたが、自己理解がなされていないため、市の教育相談員を含めた三者面談を続けた。地域の障害特性に理解のある企業を紹介してもらい、インターンシップを行い、マッチングを行った。【全日制・専門学科】	12
手帳取得に対する支援	障害者手帳の取得に向けた情報提供や障害者手帳を取得するための支援を行うこと	●学校と主治医も連携しながら(一人暮らしを希望していたので)、本人の希望をかなえるために、必要なスキルを身に付けることができるように、療育機関を紹介したり、精神障害者保健福祉手帳を取得したり、対処法について考えていった。【全日制・普通科】 ●障害特性を持つ生徒や保護者と面談を行った(保護者は生徒の特性に理解があったので、スムーズに話が進んだ)。障害者手帳を持っていなかったため、手帳を持つことの意義(就職や人生の節目で自分を守る武器となること)等を話し、取得を促した。【全日制・専門学科】 ●対人関係やコミュニケーションに課題を感じられたため、あらゆる進路先の選択肢があることへの理解を促し、診断・手帳取得に向け、早期に他機関と連携を図った。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】	9
自己理解に関する指導・支援	生徒が自分の特性、長所・短所、得意・不得意、不得意なことへの対応等、自分について多面的に理解していく過程を支えること	●良い所、できることできないことを確認しながら、希望とのギャップを認識することができた。【定時制・普通科・通級設置校】 ●自己の特性について理解不十分だったため、本人や保護者と面接を重ね特性の理解と、自分なりの対処方法について長期的展望を共有した。医療機関への受診を勧め、主治医とも連携した結果、基本的な生活習慣が整うようになった。【全日制・普通科】 ●自己理解のため他からみた自分を気付かせる授業を行った。【定時制・専門学科】	9
進路先への要望・働きかけ	進路選択時に生徒の希望やニーズに応じて進路先に要望を出したり、働きかけを行ったりすること	●企業と連絡をとり、実習が可能であれば実習をさせてもらった。【全日制・普通科】 ●進学先の先生が卒業前に来校した際に、生徒の情報提供を行った。障害がある生徒のため、必要に応じた補助具の使用許可や、どの程度授業が理解できているか様子を見ていただいた等。【全日制・専門学科】	4
その他	上記の項目に該当しないこと	●学校の宿題・課題が提出できない。興味のあることとないことの取り組みに大きなムラがある。適切に助けを求めることが難しい。【全日制・普通科/専門学科】	1

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

表3-2-7-② その他、進路先決定に向けて取り組んだ指導・支援 (n=105)

カテゴリ	定義	記載例	件数
生徒の希望や特性に寄り添った進路指導	生徒の進路希望や強み・弱み等を考慮し進路に関する指導・支援を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ●就労に向けたケース会議後に「自分は障害者なのか」と悩み落ち込むことがあった。特に同年代の友人との対人コミュニケーション力には困難があるが、非常にまじめな生徒であり、学校も皆勤であったため、働く上でその強みが大いに役立つことを伝え自己肯定感を高める声掛けをしながら就労に向けた話を進めていった。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】 ●本生徒が大学を志望していたため、スケジュールを見える化し、担任が付きっきりで指導するなどした。【全日制・専門学科】 ●特性に応じて課題や助言を工夫し、個別の添削指導を通して学力の向上を図った。【全日制・普通科】 	30
専門職や関係機関との連携・協力	専門職や就労支援機関、医療機関などの関係機関と連携した支援のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●自己理解を深めるため、就労・生活支援センターの職能評価や、県立総合リハビリテーションセンターにある職業能力開発施設における職能評価(基礎評価・応用評価)を受けてもらうようにしている。【定時制・普通科・通級設置校】 ●スクールカウンセラーによる面談で心の安定を図る。ソーシャルスキルトレーニングも学年をおって少しずつ行った。卒業後も本人自身でなんとかできるように、とのトレーニングであった。【全日制・普通科】 ●共通テスト受験に向けて、どのような配慮がふさわしいか、専門家(発達障害アドバイザー)の助言を得ながら進めた。【全日制・総合学科】 	28
体験・実習を通じた指導・支援	体験や実習を通し、知識やスキルを身に付けたり、意識の変容を促したりする指導・支援を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒は、未知の物事に対する不安が強かったため、担任が上級学校のオープンキャンパスのみでなく、プログラミング教室などへの参加を働きかけ、選択の幅が大きくなるようにした。また受験の際の受け応えに心配があったため、面接指導を行った。【全日制・普通科】 ●3 年次1学期には、職業訓練センターへの見学、相談を実施した。(当該本人、保護者) →本人の進路決定の際、選択肢には入らなかったが、絞り込むことができる契機となった。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】 ●夏季休業中に就労移行支援事業所への体験通所を行った。その後、事業所・学校・支援機関・本人・保護者と振り返りを数度行い、卒業後に通所することを決定した。【全日制・総合学科】 	22
情報共有	効果的な指導・支援のために学校や関係機関、保護者間で生徒の情報を共有すること	<ul style="list-style-type: none"> ●学級担任はその生徒に対し、とても親密に接していた。生徒も親に対し、学校の状況を毎日報告しており、何かあった場合には親から学級担任へ電話が来て、共通理解が構築できていた。そのおかげか、本人のやりたい職種、会社もすぐ決まった。【全日制・専門学科】 ●相談支援専門員と月に1回程度校内で本人を含めたケース会議を行い、本人の希望の聞きとりを行った。【定時制・普通科・通級設置校】 ●中学校からの引継ぎを受け、本校でも個別的教育支援計画・指導計画を作成し、進路先に引き継ぐ準備をした。【全日制・普通科】 	19
校内連携・配慮	学校内で関係者が連携・協力し、生徒のニーズに配慮し	<ul style="list-style-type: none"> ●毎週、スケジュール、やるべきこと、プリント類の確認を一緒にした。【定時制・普通科・通級設置校】 ●物の管理や提出物の把握など、苦手とすることに対して担任と共に、表を使ってチェックするなど具体的な方 	17

カテゴリ	定義	記載例	件数
	たかかわりや指導・支援を行うこと	法と一緒に試した。【全日制・普通科】 ●職員対象の「発達障害に関する研修会」を毎年開催し、学校生活での各指導場面において職員が生徒に対し適切な関わりができるようにした。【全日制・普通科】	
授業を通じた指導・支援	授業内で生徒のニーズに応じた学習内容の設定や、指導・支援を行うこと	●他の生徒とともに「就職講座」という指導の中で、学科試験、面接対策や履歴書作成等を行った。本人の希望に則して、会社が決まった。【全日制・普通科・通級設置校】 ●総合的な探究の時間を使い、就職希望者全員に求人票の見方指導、入退室の所作指導、面接指導、作文指導、履歴書指導などを行った。加えて担任や就職担当による個別の面談を重ね、フォローをした。【全日制・普通科】 ●本生徒は学校設定科目の「研究」において、「障害特性からくる生きづらさ」をテーマとして文献研究や調査研究を行う過程で自己理解を深めていった。その結果、心理学をより深く学べる学部への進学を志すようになり、次第に落ち着きがみられるようになった。研究指導においては共感的な対応を心がけた。【全日制・普通科】	11
進路先への相談・確認	生徒に関する情報や配慮などについて進路先へ相談、確認をすること	●希望していた企業に、採用予定を確認した。【全日制・専門学科】 ●本人の特性を踏まえ、生徒、保護者、担任、ハローワークの職員の4者で就職する企業の選定を進めた。受験先の企業にも本人の特性を伝え、本人も納得して受験し、内定を得ることができた。【全日制・普通科】 ●入試に向けて、特別な配慮が必要であれば、事前に受験校に申請することができることを担任から保護者へ連絡し、大学への申請が必要かどうかの確認をおこなった。必要である場合、進路から大学へ連絡した。【全日制・普通科】	10
通級による指導	通級指導教室において、障害による学習上または生活上の困難を改善・克服することを目的とする指導(自立活動に相当する内容)を行うこと	●通級の中で、福祉の仕事について確認したり、面接練習を実施した。校内の様々な先生方にも依頼して面接練習や教科(入試)の指導をしてもらった。書類については適宜、保護者に連絡をとり確認するようにした。【全日制・普通科・通級設置校】 ●通級指導で卒業後を見据えた指導。【定時制・普通科・通級設置校】 ●2～3年次に行った、通級指導の自立活動のカリキュラムの中で、特別支援学校の就労支援プログラムを参考にした独自の指導を系統的に行った。 (例)カートの操作練習 多様な作業(指示された作業を指定時間内に、指示どおりに行う練習) 作業後の点検や報告のし方の練習。【全日制・普通科】	7
障害者雇用の選択に関する指導・支援	障害者雇用の選択に当たり、適切な支援や調整を行うこと	●一般雇用と障害者雇用の違いを説明した上で、どちらの方法で就職するか確認したところ、障害者雇用で就職を希望するとのことであった。ハローワークでの求職登録、障害者職業センターでの職業相談、障害者手帳の取得、就労・生活支援事業所での相談を行った。【全日制・総合学科・通級設置校】 ●手帳がないと就職は厳しいということが分かり、手帳の取得のため担当医との相談を行った。同時進行でインターンシップ先を地区内の養護学校の就職支援コーディネーターの方の協力を得ながら開拓した。【全日制・総合学科】	3

カテゴリ	定義	記載例	件数
その他	上記の項目に該当しないこと	●気分が躁鬱状態にある時はその原因について話を聞き、その解決法について自分で考えさせた。【全日制・普通科/専門学科】	1

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

③自立と社会参加に向けた指導・支援

自立と社会参加のための力の習得に向け、取り組んだ指導・支援内容を自由記述でたずね、記述内容を分類した。結果、「社会的スキルを高める指導・支援」「通級による指導」「生活スキルを高める指導・支援」「体験・実習を通じた指導・支援」などが挙げられていた（表3-2-8）。

自立に向け必要とされる力は幅広い中、通級による指導や体験的な学びの機会の設定などを通して、様々な指導・支援に取り組んでいることがうかがえる。中でも、職業生活において重要となる対人面に関する指導や、土台となる生活面に関する指導に取り組んでいる様子が見えてくる。

表3-2-8 自立と社会参加に向けた指導・支援 (n=103)

カテゴリ	定義	記載例	件数
社会的スキルを高める指導・支援	他者とのコミュニケーションや状況に応じた行動など、社会的スキルを高める指導・支援を行うこと	●パーソナルスペースについて、一緒に取り組んだり、日々、職員室等に来るような用事を作り、先生方に協力してもらいながら、入退室のあいさつやふるまい方を見て、アドバイスをもらうようにした。【全日制・普通科・通級設置校】 ●困ったときに必ず誰か(場所も含めて)に伝えることや伝える練習シミュレーション【全日制・普通科】 ●自分とは異なる意見に接したときに、自己主張をするだけでなく、相手の考えをきき、よく考えて建設的な会話ができるよう支援を行いました。特にグループ活動のときは、教員が入り、ひとりよがりにならないよう、適切なタイミングで助言をしました。【全日制・専門学科】	51
通級による指導	通級指導教室において、障害による学習上または生活上の困難を改善・克服することを目的とする指導(自立活動に相当する内容)を行うこと	●通級指導でソーシャルスキルやセルフアドボカシースキルの学習など。【定時制・普通科・通級設置校】 ●通級指導の一環として、若者サポートステーションにおける若者への就労支援事業のボランティア清掃活動やジョブトレーニングに参加している。【定時制・普通科・通級設置校】 ●通級指導において、合理的配慮の申請や、高校卒業後に得られる支援についての情報提供、自己の特性の理解を進める指導(アセスメントの結果分析)を行った。定期的に卒業後の不安を解釈、解消するためにカウンセリングを行った(通級担当)。【全日制・総合学科・通級設置校】	17
生活スキルを高める指導・支援	職場や家庭で必要とされる生活面のスキルを高める指導・支援を行うこと	●書類の整理などなかなかできない。ファイルへの綴じ込みなどをいっしょに行った。指示だけではできないし、代わりにやってやるとその書類を使えなくなってしまう。【全日制・専門学科】 ●忘れ物を無くすため、必要な物事はメモする習慣を身	16

カテゴリ	定義	記載例	件数
		につけさせる。【全日制・普通科】 ●服薬を忘れないための工夫、忘れた時のために薬の予備をどう準備しておくかを考える指導を行った。【全日制・専門学科・通級設置校】	
体験・実習を通じた指導・支援	体験や実習を通し、知識やスキルを身に付けたり、意識の変容を促したりする指導・支援を行うこと	●生徒が得意としているパソコンやCAD製図作成の能力を伸ばすために専門教科や実習を学習し、検定や発表の場に参加。【全日制・専門学科】 ●定時制高校なので昼の間にアルバイトを続け、仕事のスキルを身につけた。【定時制・専門学科・通級設置校】 ●障害者移行就労支援センターが主催するイベントや関連するイベントへ積極的に参加させ、時には障害者支援を行うようなことものぞんだ。【全日制・普通科/専門学科】	14
就労や進学を想定した指導・支援	生徒の進路希望や能力等に合わせ、就労や進学に向けた指導・支援を行うこと	●2社目の志望先で切り替え可能となり、応募、内定をいただき、3～4年経った現在も辞めずに働いている。試験までは、担当教員のねばり強いサポートに何とかくらいつきながら、面接練習等を重ねた。手帳については、進路主任と本人の面談で、受け入れてくれた様子。【定時制・総合学科・通級設置予定】 ●進学・就労にむけて困難を抱える仲間と共に、就労支援(サポートステーション)施設に赴き、施設の方との面談を実施した。「自分のペースでじっくりと進路決定をしても良い」とのメッセージに大きな安心感を得ていた。その後、就労にむけて興味関心が湧き、自主的にアルバイトをはじめた。彼にとっては、大きな進歩だったようで、働き始めてからスクールカウンセリングの利用頻度も落ち着いていった。【全日制・普通科】	12
心理的健康を支える指導・支援	情緒の安定に向けた支持的かわりや情緒のコントロールを支えるスキル指導、服薬管理など、心理的健康を支える指導・支援を行うこと	●自己肯定感を高めるために、出来たことを認めることを繰り返す。【全日制・普通科】 ●毎日決まった時間に日誌をつけることで、スケジュール管理をさせ、明日の予定をしっかりと確認させ、心の準備をさせた。【全日制・普通科/専門学科】 ●在籍期間を通じた心理支援を行うことでメンタルコントロールの方法を自分なりに身につけていったと考える。【全日制・普通科】	11
自己理解に関する指導・支援	生徒が自分の特性、長所・短所、得意・不得意、不得意なことへの方法等、自分について多面的に理解していく過程を支えること	●特性や必要な支援について漠然と理解していたため、自己理解を促すために、「わたしのトリセツ」を作成した。具体的には、自分が困っていること、苦手なことを当事者の事例などを参考に書き出した。書き出したものに対して、一つずつ対処方法を考えた。対処方法は自分で対応すること、誰かに支援してもらうことに分けるようにした。さらに誰かに支援してもらうことを一覧にして、どういう理由で何をお願いしたいのかを整理した。【全日制・普通科・通級設置校】 ●「学校の指導」ではなく、本人の特性(真面目、社会的ルールを守ることへの強いこだわり)が良い方向へ発揮された(交通安全委員長という役につき、活躍した)。【全日制・普通科】	10
授業を通じた指導・支援	授業内で生徒のニーズに応じた学習内容の設定や、指導・支援を行うこと	●履歴書の指導、面接指導、マナー指導を行った。【全日制・専門学科】 ●総合的な探究の時間(当時は総合的な学習)では、地域の交通安全をテーマにグループ学習を行った。生徒のグループでは反射材について取り組む事になった。PCの扱いにまだ不慣れだったため、検索方法や優れたHPなどを紹介し、まとめられるように支援した。また、実際	10

カテゴリ	定義	記載例	件数
		に蛍光材や100円ショップ等でも購入できる材料から反射グッズを製作し、発表するまでを指導した。【定時制・普通科/専門学科・通級設置校】 ●「進路講座」では、ソーシャルスキルの向上ではなく、その基礎にあたるコミュニケーションへの意欲涵養をはかる「リラックス・コミュニケーション」を年6回(1回2時間)、「●●(地域名)カフェ」を年2回(1回2時間)実施している。【通信制・普通科】	
専門職や関係機関との連携・協力	専門職や就労支援機関、医療機関などの関係機関と連携した支援のこと	●服薬が心身のコントロールに非常に有効だったので、薬の調整を続けながら、社会に出てから自分で健康管理ができるよう主治医の指示のもと学校でも助言を行った。【全日制・普通科】 ●発達障害支援員との面談、WAISの実施(高3夏)、ケース会議【全日制・普通科/専門学科】 ●障害者職業センターを利用して、就労に関する適性を見極めるための職業評価を行った。職業評価を受けたことで、本人の障害受容が深まり、就職に対する意識が固まった。【全日制・専門学科】	9
スケジュール管理	課題や作業を計画的・効率的に進められるよう、スケジュール管理に関する指導・支援を行うこと	●担任とともに課題を書き出して視覚化し、スケジュール調整や優先順位の決め方をスキルとして身に着けられるようにした。【全日制・普通科/専門学科】 ●提出物の漏れがないか、スケジュール管理ができるように。借りたものを返すように。【全日制・専門学科】 ●スケジュール管理のため、1週間の計画やテスト勉強の計画、提出物の確認などを行った。また、友達とトラブルがあったときにはどのように伝えたらよかったのかを振り返った。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】	6
情報共有	効果的な指導・支援のために学校や関係機関、保護者間で生徒の情報を共有すること	●定期的(不定期)の面談における自己啓発。【全日制・普通科/専門学科】 ●合理的配慮の希望があったときに、支援員を紹介した。 ・母親と支援員が連絡を密に取り、家で状態が悪い時連絡を受けた。 ・学校での様子を悪い時だけでなく良い時も支援員から母親に連絡し、母親がポジティブな気持ちになるように常に働きかけた。これにより家族の関係が改善した。【全日制・専門学科】 ●支援員、校内コーディネーターとのアンガーマネジメントの実施 ・授業の担当者とは本人に関する留意事項を共通理解で持ち、授業中何かあればすぐ別室で落ち着かせるなど、全教員からの支援体制ができていた。【全日制・普通科】	6
作業スキルを高める指導・支援	仕事に必要な作業面のスキルを高める指導・支援を行うこと	●手先が不器用であったため、特に実習を伴う授業では、時間をかけて指導して頂いた。【全日制・総合学科】 ●接客業が就職先であったため、接客時の声掛けを事前に把握し、実際に声に出して一緒にやってみる練習を行った。大変不器用で体の感覚も把握しにくかったため、エプロンの着脱の練習も行った。別の実習先では商品の重さを測る作業があったため、秤の使い方を試すなど、実際の就労後や採用のための行動を一緒に練習した。【全日制・専門学科】	3

カテゴリ	定義	記載例	件数
合理的配慮	障害により生じる困りごとを軽減するために、環境の調整を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ●読みが苦手なため、各教科、考査での漢字へのルビ打ちの支援を行った。【定時制・普通科・通級設置校】 ●気持ちが不安定な時は、別室でクールダウンできる環境を整えた。 ・周りの音が気になる時には、耳栓の使用を許可する。 ・予定の変更がある場合は早めに伝える。【全日制・普通科】 	2
その他	上記の項目に該当しないこと	<ul style="list-style-type: none"> ●基本的な生活習慣は身につけており、挨拶もしっかりとできる生徒である。しかし、一人でバスや電車に乗ったことがなく、自立に向けた支援が乏しいように感じる。家庭での指導・支援が必要不可欠だが、学校がどこまで介入しているのかわからず、具体的な指導・支援はできなかった。どのように保護者に生徒の自立を促すべきなのかを教えていただきたい。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】 	1

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

④連携による指導・支援

保護者及び関係機関と連携した内容と、連携のきっかけを自由記述でたずね、記述内容を分類した。

結果、保護者との連携のきっかけとしては、「学校から保護者への相談・働きかけ」「保護者からの申告や相談の希望」「中学校からの申し送り」などが、連携内容としては、「専門職や関係機関との連携・協力」「進路の選択肢と生徒の進路希望」「学校や家庭における様子」に関する情報共有、「保護者（家庭）の理解や協力」「定期的な面談やケース会議の実施」などが挙げられていた（表3-2-9）。

関係機関との連携のきっかけとしては、「進路選択・進路決定によるつながり」「学校からの相談・問い合わせ」「保護者からの申告や相談の希望」などが、連携機関としては、「進路先（大学、専門学校、企業、事業所）」や「就労に関する相談・支援機関」などが、連携内容としては、「専門的な助言や情報提供」「情報共有」「個別の教育支援計画等の引継ぎ」「体験・実習の機会の提供」などが挙げられていた（表3-2-10）。

記述内容を踏まえると、どちらも、高等学校のほか、保護者等からの相談・働きかけなどをきっかけとし、ケース会議や面談等、多様な連携を通じて、生徒の様子や特性、指導方針の共有を行っている様子が見えてくる。

表 3-2-9 保護者との連携／どのようなきっかけで、どのような連携をしたか

(n=126)

カテゴリ	定義	記載例	件数
連携のきっかけ／学校から保護者への相談・働きかけ	学校から保護者に面談や電話等を通じた相談や働きかけが行われたことで、連携につながったもの	<ul style="list-style-type: none"> ●成績不振や提出物が出せない、授業中に寝るなどの学校生活での課題となることについて保護者会を行い、卒業後の進路に向けて、今すべきことを相談するようになった。【全日制・普通科】 ●中学校からの申しおくりがなかったが、パニックをおこしたり、人間関係のトラブルや整理整頓が苦手だったため保護者と面談を行った。そこで、はじめて、診断を受けていたことがわかった。その後高3冬になって初めて本人より通級指導もしていたことを告げられた。【全日制・普通科/専門学科】 ●入学当初より学校でトラブルがあった際に、保護者に電話や直接来校してもらい話をした。学校での指導方針を伝えたり、障害者枠での就労を決めた際にも、学校と家庭の役割を確認した。学校では主に関係機関との連絡調整、インターンシップの巡回などを行った。家庭では本人の思いを聞いたり、ハローワークへの求人登録、インターンシップの送迎などをした。【全日制・普通科・通級設置校】 	29
連携のきっかけ／保護者からの申告や相談の希望	保護者が生徒の障害や状況について開示・相談することで、連携につながったもの	<ul style="list-style-type: none"> ●入学時に保護者から申告があった。その場合は、卒業するまで保護者等と連携は取りやすかった。【全日制・総合学科】 ●入学時に中学校から申し送りがあり、保護者からも相談があったためスムーズに連携できた。保護者とは常に学校と家庭での様子を情報共有した。【全日制・普通科】 ●母親が担任、顧問に対して、オープンに詳細を話してくれたことによって、企業に対しても隠すことなく、生徒の状況を伝えられたので、会社での研修等でも合理的配慮を実施してもらえた。【全日制・普通科】 	12
連携のきっかけ／中学校からの申し送り	中学校からの情報の引継ぎが行われたことで、連携につながったもの	<ul style="list-style-type: none"> ●中学校からの申し送りを元に、直接連絡を取った(保護者に)。【全日制・普通科】 ●中学校が保護者に入学前の連携を提案して、高校との橋渡しをしてくださったおかげで、入学前から、保護者と連携をすることができた。その結果、入学直後の不適応の予防や軽減、さらにタイムリーな対応が可能になった。【全日制・普通科】 ●中学校からの引継ぎにより、入学時より担任が保護者と密に連絡を取り合った。また、その担任が、2年時は副担任、3年時は担任として当該生徒をサポートした。3年間にわたって関わり続けることで、保護者との信頼関係が深まり、進路指導もスムーズであった。【全日制・普通科】 	11
連携のきっかけ／生徒からの申し出	生徒から学校や保護者に困りごとの相談が行われることで、連携につながったもの	<ul style="list-style-type: none"> ●不登校期間が長いこと、匂いや光に敏感なこと、こだわりの強さ等から ASD が疑われていた。定期的なスクールカウンセラー面談から、本人が「自分のことをもっと知りたい」と訴えるようになった。スクールカウンセラーが本人の思いを保護者に伝えたところ、生育歴にも気がかりさがあったことから、病院受診をすすめるに至った。その後、服薬、病院でのカウンセリングを開始。病院との情報共有、医師からの助言等があり、自己理解が深まりとともに登校が安定していった。【定時制・普通科・通級設置校】 	3

カテゴリ	定義	記載例	件数
		●本人が学校の成績不振に悩み、進級も危ぶまれてスクールカウンセラーと面談した際、発達検査を勧められた。本人が居住地の発達支援センターで発達検査を受け、その報告(見たて)に学校も出席した。【全日制・普通科】	
連携内容／専門職や関係機関との連携・協力	専門職や就労支援機関、医療機関等の関係機関と連携した支援のこと	●ケース会議を年8回くらい実施(両親と、学校関係者、教育委員会指導主事を含む)。【全日制・普通科】 ●管轄ハローワーク担当者の指導により、学校で懇談の場を設けた。【全日制・専門学科】 ●保護者もスクールカウンセリングを利用し、家庭・学校で連携を図った。【全日制・普通科】	35
連携内容(情報共有)／進路の選択肢と生徒の進路希望	卒業後の進路選択肢と生徒の進路希望について情報共有を行うこと	●定期的にスクールソーシャルワーカーとの面談を実施し、障害者の働き方についての情報の共有と、進路学習の進め方について共有するようにした。また、インターシップの際は、通勤練習を家庭で行って貰った。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】 ●本人の進路目標の確認を繰り返し行った。【全日制・普通科】 ●保護者面談で学びの先にある仕事や、配慮される職種などを相談した。【全日制・普通科】	35
連携内容(情報共有)／学校や家庭等における様子	学校や家庭等での生徒の様子について情報共有を行うこと	●学級担任はその生徒に対し、とても親密に接していた。生徒も親に対し、学校の状況を毎日報告しており、何かあった場合には親から学級担任へ電話が来て、共通理解が構築できていた。そのおかげか、本人のやりたい職種、会社もすぐ決まった。学級担任が学校での親がわりとなって、週に3、4回は保護者に電話連絡していました。【全日制・専門学科】 ●三者面談はもちろん、送迎時に学校や家庭での様子を情報交換をした。【定時制・専門学科】	26
連携内容(情報共有)／指導方針や指導内容への理解	学校での指導方針・指導内容について情報共有を行うこと	●通級の指導を実施する際、指導内容に関する説明及び意見交換を行った。また、進路面談等において、意思確認や障害者雇用で就職する際の関係諸機関における手続きについて説明した。【全日制・総合学科・通級設置校】 ●通級担当として学期毎に、状況説明、指導内容報告の為の面談を行う(担任と共に)。【全日制・総合学科・通級設置校】 ●週1回の通級指導の連絡帳を利用して保護者と連絡をとった。【定時制・普通科・通級設置校】	23
連携内容(情報共有)／特性に対する理解	生徒の特性について理解し、情報共有を行うこと	●入学当初から、生徒の特性について情報共有を行ってきた。入学後は、生徒の成長に伴い起こる変化や問題について、常に情報共有を行い、共通認識を持って、指導・支援に当たってきた。【全日制・普通科】 ●生徒指導案件の際、保護者と連絡を取りながらどこに問題があるのか、自分の行動のどこがいけないのか、など人の気持ちや自分の行動についてじっくりと考える時間を持った。【定時制・普通科・通級設置校】	16
連携内容／保護者(家庭)の理解や協力	生徒の成長や生活を支えるための保護者による理解や協力のこと	●提出課題の未提出が続いた。→保護者に生徒と共に取り組んでもらった。【全日制・普通科】 ●保護者と担任との面談を通して、2つのことを家庭で取り組んでもらえるよう依頼した。 ①自分のことは自分でできるよう声かけ・見守りを行う。 ②人との距離の取り方について声かけを行う。【全日制・普通科】 ●生徒の自己理解を進めるために、過去を振り返る機会において、家庭でどのような働きかけがあったか、保護	31

カテゴリ	定義	記載例	件数
		者と協力して仕上げるワークシートを作成して授業を実施した。【定時制・普通科・通級設置校】	
連携内容／定期的な面談やケース会議の実施	定期的な面談やケース会議により、課題や困りごとに対応すること	<ul style="list-style-type: none"> ●三者面談。時々、状況報告のため、保護者に来校を求めて連携した。【全日制・普通科/専門学科】 ●定期的な保護者との面談を行うことで、保護者と教員間の支援の方向性の共有を図ることができた。【全日制・普通科】 ●ケース会議を年8回くらい実施(両親と、学校関係者、教育委員会指導主事を含む)。【全日制・普通科】 	27
連携内容／個別の教育支援計画等の引継ぎ	個別の教育支援計画等を活用して行われた引継ぎや支援のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒指導をきっかけに、大学進学後も支援の必要があることを共有し、進路決定後、保護者に個別の教育支援計画を渡し、進学先の大学の支援センターに提出し支援を受けるよう促した。【全日制・普通科】 ●個別の教育支援計画と個別の指導計画を作成。指導計画については、学期毎に評価と目標を作成し、学期末に保護者、本人、担当とで面談を実施。相互に確認をしながら進めていった。【全日制・普通科・通級設置校】 ●小学校の時に通級指導を受けており、小学校から中学校、中学校から高校と「移行支援シート」を活用して保護者との連携を円滑に実施することができた。【全日制・総合学科】 	8
連携内容／医療機関の適切な受診	障害理解のために必要に応じて医療機関を受診したり、必要な支援を受けること	<ul style="list-style-type: none"> ●生徒は、生活の中で困り感が増し、吐き気や頭痛を言っていたが、詳しいききとりの中で、忘れっぽさや、じっとしていることの難しさを訴えていた。しかし、保護者の理解が得られず苦しんでいたため、本人の自己理解と、保護者の理解を深め、病院を受診することにより、困り感を軽減することを目的に、特別支援教育コーディネーターやスクールカウンセラーと保護者の面談を重ね、保護者の理解を得ることが出来た。【全日制・普通科】 ●不登校期間が長いこと、匂いや光に敏感なこと、こだわりの強さ等から ASD が疑われていた。定期的なスクールカウンセラー面談から、本人が「自分のことをもっと知りたい」と訴えるようになった。スクールカウンセラーが本人の思いを保護者に伝えたところ、生育歴にも気がかりさがあったことから、病院受診をすすめるに至った。その後、服薬、病院でのカウンセリングを開始。病院との情報共有、医師からの助言等があり、自己理解が深まりとともに登校が安定していった。【定時制・普通科・通級設置校】 	8
その他	上記の項目に該当しないこと	●通常の連絡のみ。【全日制・普通科】	1

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

※より高次のカテゴリに分類できると考えた場合は、カテゴリ名の前に、大カテゴリ名をスラッシュで区切り付す形とした(例:大カテゴリ名/カテゴリ名)。

表3-2-10 関係機関との連携／どのようなきっかけで、どのような機関と、どのような連携をしたか (n=97)

カテゴリ	定義	記載例	件数
連携のきっかけ／進路選択・進路決定によるつながり	生徒の進路選択・進路決定によりつながりを持つことで、関係機関から情報提供や支援を受けること	<ul style="list-style-type: none"> ●高等技術専門学院へのインターンシップを希望した時点。【定時制・専門学科】 ●ハローワークとの連携は、新規学卒者としての就職希望がきっかけ。事業所との関係は、ハローワークの紹介と保護者の希望が一致したことがきっかけで連絡を取るようになった。【全日制・普通科】 ●進学先決定後にその大学に引き継ぎを申し出、現状理解を促した 進学先大学はその後保護者、本人、担当職員、支援職員で面談を実施。【全日制・普通科】 	25
連携のきっかけ／学校からの相談・問い合わせ	学校が相談・問い合わせをすることで、関係機関から情報提供や支援を受けること	<ul style="list-style-type: none"> ●管轄ハローワーク担当者に当該生徒の相談をしたことがきっかけとなった。【全日制・専門学科】 ●進路希望先の大学(入試課)へ直接 tel を入れて、高校での生活の状況を伝え、受け入れ可能かどうか確認を行った。【全日制・普通科】 ●就職する前に受ける応募前見学の際に前もってお話しをする機会をもった。【全日制・専門学科】 	17
連携のきっかけ／保護者からの申告や相談の希望	保護者が生徒の障害や状況について開示・相談することで、連携につながったもの	<ul style="list-style-type: none"> ●もともと本人と母親が幼少期からお世話になっている支援センターの職員の方に学校に来校していただきケース会議を行った。【全日制・普通科】 ●母親が担任、顧問に対して、オープンに詳細を話してくれたことによって、企業に対しても隠すことなく、生徒の状況を伝えられたので、会社での研修等でも合理的配慮を実施してもらえた。【全日制・普通科】 ●生徒本人と保護者の要望により、大学へ個別の教育支援計画・指導計画を引き継いだ(生徒、保護者、特別支援コーディネーター、専門機関の担当者が大学へ行き、担当者と面談をして引き継いだ)。【全日制・普通科】 	9
連携のきっかけ／専門職や関係機関からの情報提供・助言	専門職や関係機関から情報提供・助言を受けることで、連携につながったもの	<ul style="list-style-type: none"> ●県が行っている就職支援の企業との面談会等を活用した。【全日制・専門学科】 ●専門アドバイザーや通級担当者に相談し、以下の機関に相談するようアドバイスをいただき、ケース会議に出席していただいた。 <ul style="list-style-type: none"> ・ハローワーク ・障害者就業・生活支援センター ・障害者相談支援センター <p>就労移行支援事業所への進路が決定したため、卒業前の2月に関係者(生徒・保護者、上記機関、進路先担当者)を交えたケース会議を実施予定。そこで、個別の教育支援計画の引継ぎを行う予定。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ハローワーク、学卒担当に逐一報告、相談し、実績のある企業を数社紹介してもらった。また企業の採用担当の方からも丁寧な連絡相談があり、非常に助かった。【定時制・総合学科・通級設置予定】 	8
連携機関／進路先(大学、専門学校、企業、事業所)	生徒に対する効果的な進路指導のために進路先と連携すること	<ul style="list-style-type: none"> ●進路先等への個別の教育支援計画等の引継ぎ。【全日制・普通科】 ●進学先決定後にその大学に引き継ぎを申し出、現状理解を促した 進学先大学はその後保護者、本人、担当職員、支援職員で面談を実施。【全日制・普通科】 	48

カテゴリ	定義	記載例	件数
		●進路先に連絡を取り、障害に関する内容の書類を提出し、高校と大学のスクールカウンセラーをつなげて申し送りをした。【全日制・普通科】	
連携機関／就労に関する相談・支援機関	生徒に対する効果的な進路指導のために、地域障害者職業センター等相談・支援機関と連携すること	●障害者職業センター・・・職業評価、就職後のサポートを含めた連携。【全日制・総合学科】 ●就職先に障害者就労生活支援センターにも入っていたが、本人の障害特性理解とマッチングを合わせて、職場実習を実施した。【全日制・専門学科】 ●障害者生活相談支援センター：保護者から電話をして契約。学校との情報共有。移行支援事業所の紹介。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】	32
連携機関／ハローワーク	生徒に対する効果的な進路指導のために、ハローワーク（公共職業安定所）と連携すること	●保護者やハローワークと連携し、希望就職先の障害者雇用枠を利用して就職を決定することができた。【全日制・専門学科】 ●地元にあるハローワークと連携し、障害者雇用の求人情報をいただいた。【全日制・専門学科】 ●ハローワーク（専門援助部門） クローズでの就労を目指し就職活動をしたが不採用となり、一般企業（福祉枠）での採用に切り替えることになったため。【定時制・普通科・通級設置校】	19
連携機関／行政	生徒に対する効果的な進路指導のために、教育委員会等行政と連携すること	●職員研修を開催するにあたり、県教育委員会に依頼し、校内支援体制の充実に向けた支援、生徒の学習や生活に関する支援について主に指導していただいた。【全日制・普通科】 ●教育委員会のソーシャルワーカー、大学入試の際の配慮について医療機関から助言をもらい、入試の事務局へ伝えた。【全日制・普通科/専門学科】 ●市の福祉とは、サポートファイルの引き継ぎ、進路先へは就労移行支援計画、障害者就業・生活支援センターとは、インターンシップ受入先との連携。【定時制・普通科・通級設置校】	11
連携機関／特別支援学校	生徒に対する効果的な進路指導のために、特別支援学校と連携すること	●特別支援学校の就職コーディネーターの方に相談した。【全日制・普通科】 ●地域支援センター（特別支援学校）による学校訪問 →進路指導業務に長く携わった経験を持つ担任による、早期対応の要請をきっかけに進路（福祉就労を含む）先の情報提供、相談窓口の紹介等の情報が得られた。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】	10
連携機関／就労に関する訓練機関	生徒に対する効果的な進路指導のために、就労移行支援事業所等就労に関する訓練機関と連携すること	●就労移行支援事業所・・・情報交換、個別の教育支援計画の引継ぎ、卒業後の生徒の情報交換。【定時制・普通科・通級設置校】 ●A型事業所：学校から連絡を入れてインターンシップを実施。職業判定の資料の情報共有。移行支援計画。移行支援会議の実施。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】 ●スクールソーシャルワーカーに調整を依頼し、相談支援事業所、障害者就業・生活支援センター、進路先となる就労継続支援B型事業所・宿泊型自立訓練事業所等との関係機関との連携を行った。相談支援事業所においては、本人・保護者が卒業後の進路として希望する進路先への入所に向けたサービス利用計画の作成、関係機関とのケース会議の実施に向けた調整等を行っていただいた。障害者就業・生活センターには、アセスメントを行っていただき、進路先には、実習を実施していただいた。【全日制・普通科・通級設置校】	8

カテゴリ	定義	記載例	件数
連携機関／医療機関	生徒に対する効果的な進路指導のために、医療の専門職や病院と連携すること	<ul style="list-style-type: none"> ●医療機関(心療内科)。受験前に本人の精神状態が不安定であったため、養護教諭の紹介により医療機関を受診した。【全日制・普通科/専門学科】 ●学校が定めた合理的配慮が本人の特性に応じているか、かかりつけ医からの助言指導。【全日制・普通科・通級設置校】 ●某大学に当該生徒が少ない頃から定期的に相談に行っていた作業療法科の教授の方に、手帳取得時に意見を頂いた。【全日制・総合学科】 	6
連携内容／専門的な助言や情報提供	専門職や関係機関から進路に関する助言や情報を受けること	<ul style="list-style-type: none"> ●就業・生活支援センターで相談ののってもらえたことで、保護者・学校とも安心できた。 ※学校のすぐ近くにセンターがあり、人権学習や部活動での交流があるので、その関係で支援センターの方も学校によく来られる。【全日制・専門学科/総合学科】 ●ハローワークと密に連携を行い就業先の斡旋や卒業後のトライアル雇用についての相談など行った。【全日制・総合学科・通級設置校】 ●職業訓練校より改めて高校訪問があり、本人、保護者、担任と一緒に話を伺った。入試に向けてのアドバイスなどをいただいた。【全日制・普通科・通級設置校】 	33
連携内容／情報共有	生徒に対する効果的な進路指導のために、学校、保護者、関係機関間で生徒について情報共有を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ●合格後、教務学生担当(就職担当)、各科代表、准教授(社会福祉士、介護支援専門員)の方をまじえて情報交換を行った。【全日制・普通科/専門学科】 ●以前から通っていた児童発達支援・放課後デイサービス、保護者、担任の三者で進路選択に向けてどのように連携していくかを話し合った(3年6月末)。【全日制・普通科】 ●卒業後は就職を希望していたので、3年次生になってすぐに障害者就業・生活支援センターと連携した。その後、地域の障害者基幹支援センターを含め、生徒・保護者・学校との5社で定期的にケース会議を行った。【全日制・総合学科】 	32
連携内容／個別の教育支援計画等の引継ぎ	個別の教育支援計画等を活用して行われた引継ぎや支援のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●進路先等への個別の教育支援計画等の引継ぎ。【全日制・普通科】 ●本校が作成する個別の移行支援計画書を本人、保護者、発達センターの立ち会いで承認後、本人が封書で進学先へ提出する。【全日制・普通科】 ●個別の教育支援計画を進路先へ引き継ぎ。【全日制・普通科】 	24
連携内容／体験・実習の機会の提供	体験や実習を通し、知識やスキルを身に付けたり、意識の変容を促したりする指導・支援を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ●若者サポートステーション・・・生徒の実習の機会を確保するため連携を依頼。ボランティア清掃活動とジョブトレーニングに参加。【定時制・普通科・通級設置校】 ●ハローワーク、障害者就業・生活支援センター、発達障害者支援センター(きっかけ) 生徒の就労先の検討をきっかけに、ケース会議を開き、職場体験実習やトライアル雇用等具体的な進め方について時期・役割分担などを行った。【全日制・専門学科・通級設置校】 ●進路先が就労移行支援を行う事業所の紹介により、夏季休業中に見学・体験を行った。利用が決まってからは、事業所の心理士と情報共有を行った。【定時制・総合学科・通級設置校】 	17

カテゴリ	定義	記載例	件数
連携内容／進路先への要望・働きかけ	進路選択時に生徒の希望やニーズに応じて進路先に要望を出したり、働きかけを行ったりすること	<ul style="list-style-type: none"> ●進路先となる大学に進学後すぐ授業等が開始される前に本人と保護者、大学で障害についての説明や必要とする援助の依頼をする機会をとっていただけるよう高校の進路指導部から大学へ連絡した。【全日制・普通科】 ●志望先大学との連携では、入学試験時の支援として小論文の試験時間延長と筆記試験の時間延長を要望した。受験前に大学側と本人・保護者でオンライン面談を行った。その際には担任が立ち会った。【全日制・普通科】 ●就職支援エリアコーディネーターが企業に連絡したり直接出向き、本人の状況を伝え、企業に理解を求めた。【全日制・専門学科・通級設置校】 	9
連携内容／卒業後の相談	卒業後の進路やキャリアに関して関係機関に相談し助言を得ること	<ul style="list-style-type: none"> ●発達障害者支援センター 定期的に連絡をとり合い、卒後の相談支援、見守り等を依頼。【全日制・専門学科】 ●中学校からつながっている福祉機関に、卒業後の見守りをお願いした。【全日制・普通科・通級設置校】 ●保護者から、ソーシャル・スキルのトレーニングや就職相談の要望があったため、発達障害者支援センターの担当者と相談して連携をとるようにした。ソーシャル・スキルのトレーニングは別の施設で受けている。また、担当者からのすすめで、卒業後も支援を受けられるということで社会福祉協議会と連携をとることにした。【全日制・専門学科/総合学科】 	7
連携内容／生徒に関する事前の情報開示	就労先への生徒の障害特性等の情報提供を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ●企業に本人の特性と強みについて連絡した。【全日制・普通科/専門学科】 ●必要に応じて、本人及び保護者の了解を得て、障害の特性に関する情報提供を進路先に行った。また、卒業後に本人や保護者からの相談数も一定数あり、個別に対応している。【全日制・普通科】 ●指定校推薦での進学であったため、入試前から受験校に当該生徒の特性について報告をし、受験時の配慮を求めた。合格後決定後には、大学に願い出て、生徒が大学生活をスムーズに送れるように、本人および保護者との面談の機会を設けていただいた。【全日制・普通科】 	6
その他	上記の項目に該当しないこと	<ul style="list-style-type: none"> ●学年全体で生徒情報の共有をはかり、明確でわかりやすい指示を徹底。急な予定変更などがあってもできるだけ本人への丁寧な説明を行い、必要に応じて保護者との連携をはかった。特に、大学入試については受験会場や、受験予定大学への配慮の事前申請などの情報提供を保護者に早めに行い、生徒が安心して受験できる環境を整えることに尽力した。【全日制・普通科】 ●受験先の企業に対しては、特に配慮を求めている。自分の特性をオープンにするかどうかについては、卒業までにあらためて指導したい。【全日制・専門学科】 ●他の生徒と同様でした。【全日制・専門学科】 	3

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

※より高次のカテゴリに分類できると考えた場合は、カテゴリ名の前に、大カテゴリ名をスラッシュで区切り付す形とした(例:大カテゴリ名/カテゴリ名)。

最後に、回答事例が好事例になったと思われる要因を自由記述でたずね、記述内容を分類した。結果、「保護者（家庭）の理解や協力」「生徒の自己理解」「校内連携・配慮」「継続的な指導・支援」「情報共有」などが挙げられていた（表3-2-11）。

自己理解については進路先からもその重要性が指摘されていたが、高等学校の好事例でも重要な要因となること、また、校内での組織的な対応や、保護者や関係機関との連携が重要な要因となることも確認された。

表3-2-11 事例が「好事例」になったと思われる要因（n=152）

カテゴリ	定義	記載例	件数
保護者（家庭）の理解や協力	生徒の成長や生活を支えるための保護者による理解や協力のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●小学4年生で診断をうけ、早期から家族の理解と学校への協力があった。【全日制・普通科】 ●入学前から保護者が学校や関係機関とつながって、適切な助言や薬の処方を受けており、それらの情報の引継ぎもスムーズで、必要な支援やその方法、タイミングなどがわかりやすかったことが大きいと思います。【全日制・専門学科】 ●入学前、生徒の特性について、保護者から申し出もあり、学校側も承知した上で、学校生活を始めることができた。また、保護者の理解もあり、学校でのトラブルにも冷静に協力していただけのため、良好な連携のもと、生徒の成長を見守ることができた。【全日制・普通科】 	67
生徒の自己理解	生徒が自分の特性、長所・短所、得意・不得意、得意なことへの対応等、自分について理解し、進路選択等に生かすこと	<ul style="list-style-type: none"> ●幼少からの診断で自己理解がされており、普通に高校生活を送っていたため。【全日制・普通科/専門学科】 ●本人の強み(論理的思考力)を生かし切った。【全日制・普通科/専門学科】 ●本人がおだやかな性格であり、周囲との関係が良好であったことが大きかったようです。物事をプラス志向でとらえていくことにより、苦手なことにも前向きに取り組む、それらの過程の中で自己理解が深まっていったようでした。担任の話によると、苦手な教科の学習には力を入れていました。それ以外では、特別な指導をおこなったわけではないということです。【全日制・普通科】 	50
校内連携・配慮	学校内で関係者が連携・協力し、生徒のニーズに配慮したかかわりや指導・支援を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ●担任の先生を中心に、教科担当など多くの教員と関わって、温かな人間関係の中で成長していった。【定時制・普通科・通級設置校】 ●入学時の生徒保護者教育相談や引継ぎシート、中高連絡会の情報を元に校内委員会で支援の方法をいち早く進めたこと。また、保護者との連絡を密にし、理解・協力を得たこと。外部機関と連携も密にできたこと。【定時制・専門学科】 ●学年、担任、保健室、教育相談主任、スクールカウンセラーがチームとなって本人の支援に取り組んだこと。【全日制・普通科】 ●討議や集団活動における態度・話し方などについて、面接を通じて具体的な助言を行った。授業や部活動の大会などで、人前で発表する機会を徐々に増やし、本人の自信につながった。【全日制・総合学科】 	34
継続的な指導・支援	個々の成長や目標のために持続的に提供される指導・支援のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●高校入学前からの中学校からの指導事項の引き継ぎとその後の継続的な支援。【全日制・普通科】 ●早期より切れ目ない連携(校内、校外、関係機関)。【定時制・普通科・通級設置校】 	29

カテゴリ	定義	記載例	件数
		<ul style="list-style-type: none"> ●早期からの継続的な指導・支援や複数部署との連携、企業との連絡・調整があり、本人の自己理解や表現力向上も進んでいた。【全日制・普通科/専門学科】 ●指導の継続性、具体的な指示の提示を繰り返すことで、本人が努力している姿や意識の高揚が進んだ。【全日制・専門学科】 	
情報共有	効果的な指導・支援のために学校や関係機関、保護者間で生徒の情報を共有すること	<ul style="list-style-type: none"> ●校内で一年間かけて、相談支援専門員と連携し、関係構築(本人・保護者と相談支援専門員)ができたこと、また、内定後に、どのような働き方をしたいかまで企業やジョブコーチをまじえてケース会議で話し合えたことがとても良かった。【定時制・普通科・通級設置校】 ●本人への面談、保護者への連絡をていねいに行ったことが、納得できる進路先の選択につながったと思う。【全日制・専門学科】 ●情報共有し、お互いが生徒の最善の利益を考え行動したこと(お互いとは、本人・保護者・担任・部活動顧問・進路支援部・企業担当者)。【全日制・普通科】 	28
専門職や関係機関との連携・協力	専門職や就労支援機関、医療機関などの関係機関と連携した支援のこと	<ul style="list-style-type: none"> ●専門機関を交えてのケース会議で、生徒・保護者に直接アドバイスをしていただいたこと。また、夏休み中に就労移行支援事業所の見学・体験が行えたこと。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】 ●ハローワークと連携したことが重要であった。まずは保護者が子どもの障害に対して認識し、手帳を取得することのメリットを理解する必要がある。その際に、利害関係のある教員より、外部のハローワークの職員から説明してもらった方が、保護者も受け入れられやすい。ハローワークと連携することによって、教員も助言をもらいながら就職活動をスムーズに行うことができた。【全日制・普通科】 ●本人と保護者が納得して選択できるための情報の提供が大切だった。他機関との連携により、より専門的な機関から説明を受けることで納得して話が進み、本人も保護者も前向きに進路選択をすることができた。【全日制・普通科/専門学科・通級設置校】 	28
通級による指導	通級指導教室において、障害による学習上または生活上の困難を改善・克服することを目的とする指導(自立活動に相当する内容)を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ●保護者・本人が早くから通級希望した。通級の先生とは面談を重ね、人間関係をつくってから通級の指導に入った。【全日制・専門学科】 ●通級を主軸とした、担任・学年等の組織的な指導・支援、早期からの継続的な指導・支援。【全日制・普通科・通級設置校】 ●生徒自身の意欲が一番の要因であった。通級による指導で早期から生徒の理解のペースに合わせて学習することで、余裕をもって準備することができた。【定時制・普通科・通級設置校】 ●通級による指導開始前は「何もできない」「やりたいことはない」「でも大学に行きたい」という進路希望で担任は困っていたが、自己理解が進んだことで、まずはいろいろな体験をする必要があると本人が気づいた。障害受容はできなかったため、就労にはつながらなかったが、手厚く支援が受けられるところへ行き、本人が安定した。【定時制・総合学科・通級設置校】 	14
早期からの進路対策・準備	障害等を考慮し早期から計画的に進路選択に向けて対策や準備を行うこと	<ul style="list-style-type: none"> ●本人、保護者が県内での進学意向が強く、早期から受験に向けて、対策をたてることができた。【全日制・普通科/専門学科】 ●本生徒は、2年次から通級指導を実施。本人が早期から進路に向けての意識が高く、その活動の一つとして通級を 	10

カテゴリ	定義	記載例	件数
		実施した背景があり、強いては主体的活動に繋がったものと考えられる。【定時制・普通科・通級設置校】 ●生徒自身の意欲が一番の要因であった。通級による指導で早期から生徒の理解のペースに合わせて学習することで、余裕をもって準備することができた。【定時制・普通科・通級設置校】	
進路先への要望・働きかけ	進路選択時に生徒の希望やニーズに応じて進路先に要望を出したり、働きかけを行ったりすること	●生徒の現状を企業人事採用担当者としっかり話し合い、十分に理解してもらってから受験させた。【全日制・専門学科】 ●入試のときに問題の拡大・時間の配慮をして頂いた。【全日制・普通科】 ●進路先との共通理解を行ったので、早い段階で実態把握ができた。そのため、適切なフォローにつながった。【全日制・専門学科】	9
体験・実習を通じた学びの機会	体験や実習を通し、知識やスキルを身に付けたり、意識の変容を促したりする機会のこと	●インターンシップ(2年次)からの早期介入により生徒・保護者の障害特性理解が進んだ。 企業や就労移行など複数回による実習を通し、自分に合った進路先がイメージできた。【定時制・普通科/専門学科・通級設置校】 ●「進路先のイメージが明確に定まっているほど、学校における支援も明確かつ効果的になりやすい」→「ゆえに、進路先のイメージを早期に獲得させるべき」→「特性を有する生徒たちにイメージを獲得させるには『実際の場(かそれに近いところ)を体験させる』ことが必要」という考え方を学校として共有していることが最も重要であると考えられる。この考え方が、「早期からの継続的でブレない支援」「各機関が連携した支援」を行う上での基礎である。切実さにおいて実際のものより優れている教材はなく、また、自己理解につながるようなフィードバックのほとんどはそこから得られる。「実際の切実な場」を、いつも学校の中で提供するの難しいため、自然と「連携」が生じてくる。また、「進路先」ということを一貫して志向するため、支援にブレが生じにくい。【定時制・普通科・通級設置校】	6
その他	上記の項目に該当しないこと	●本人の就労能力には適応していたが、本人の特性であるコミュニケーションの苦手で責任者や班長などの指示やまとめるなどの責任が同時進行で発する職場で環境の限界があり、1年で離職。【全日制・普通科/専門学科】	1

※1つの自由記述回答に複数の内容が含まれる場合は、内容別に着目しそれぞれ1データとした。

付記

高等学校を対象とした調査結果のうち、予備的インタビュー調査については、別冊の資料集 第1章を、はがき調査（予備調査）、質問紙調査（本調査）における全障害種を対象とした内容等については、別冊の資料集「第2章－Ⅱ．高等学校調査」を参照されたい。

Ⅲ. まとめ

高等学校への進学率が98.8%となった現在、生徒の状態も多様化している。こうした中、進路指導に卒業後を見据えた視点を持つことや、関係機関との連携促進を行うことの重要性が提言されている。高等学校は課程や学科により、在籍する生徒の特徴が異なるうえに、個々の学校によっても特徴がある。そこで、まずは高等学校全体の状況を把握することが必要と考え、ここでは共通する課題や特徴に着目し、論ずることとする。

1. 予備的インタビュー調査

調査の結果、障害のある生徒への進路指導において、「生徒自身の特性への理解不足」と「進路先のイメージの持ちづらさ」といった2つの要因が課題となっていることが見出された。これらは、進路先における適応困難につながっていく可能性があることから、円滑な移行に向けた進路指導のあり方を検討する上で重要な内容と言える。

また、高等学校における障害のある生徒の進路指導では、自己理解や自己肯定感、対人コミュニケーション、生活面の力を培うための指導や、就労や生活等のイメージを深めるための指導を充実させていくことが必要であることがうかがえた。これらの指導は、通級による指導、学校設定科目等で対応されることが多いが、分掌による対応で得た知見も含め、学校の知見として蓄積し、より組織的に対応できるような仕組みを整えていく必要があるだろう。加えて、高等学校間の横のつながりを形成するとともに、特別支援学校のセンター的機能を活用するなどして、進路指導の質の向上を図ることが必要である。

2. はがき調査（予備調査）

高等学校の状況は課程や学科により異なることから、はがきによる予備調査により高等学校の状況把握をするとともに、回答を踏まえて後続の質問紙調査（本調査）、インタビュー調査を実施した。

高等学校における障害のある生徒の支援状況を鑑み、質問項目を極力減らすことで回収率を上げることを試みた。しかしながら、回収率は33.8%と低く、想定以上に障害のある生徒の在籍状況の把握や、障害特性を意識した指導に関心が低いことが推察された。

一方、回答のあった学校では障害のある生徒の在籍率が高かった。全日制と定時制・通信制の別に見ると、全日制では、障害のある生徒がいないと回答した学校が8.3%見られた。また、84.5%が発達障害のある生徒が在籍していると回答した。これに対し、定時制・通信制では、障害のある生徒がいないと回答した学校はわずか1%であった。また、回答校の99.0%が発達障害のある生徒、68.0%が知的障害のある生徒、63.9%が精神障害のある生徒が在籍していると回答した。連絡・連携を取った機関も、26.9%が「なし」と答えた全日制に比べ、10.6%と「なし」との回答は少なかった。

義務教育と異なり、高等学校では入学選抜があるが、障害があることで受験の際に不利になるという誤認識から、個別の教育支援計画等の資料の引継ぎを望まない生徒や保護者がいることが想定される。全日制において、生徒の障害が把握されていない理由として、こうした背景が影響している可能性がある。なお、全日制では、障害のある生徒が在籍していることを把握していながらも、生徒の障害特性に応じた進路指導は行っていないと回答した学校も見られた。

一方、定時制・通信制では、障害のある生徒が、比較的自分のペースで学びやすい環境にあることが考えられる。進学時にこうした点を考慮した学校選択がなされることで、受験の際に中学校からの引継ぎで生徒の実態把握をやすく、生徒の障害の把握につながっている可能性がある。こうした中、定時制・通信制では、進路先や医療・福祉・労働機関と連絡や連携を行いやすく、特性に応じた支援に取り組みやすい状況にあることもうかがえた。

本調査結果を踏まえ、質問紙調査（本調査）では、より詳細な現状と進路指導における好事例の把握につなげていくこととした。

3. インタビュー調査

12校26名へのインタビュー調査の結果、高等学校における障害のある生徒の進路指導では、自己理解や自己肯定感、対人コミュニケーション、生活面の力を培うための指導や、将来の生活イメージを深める指導が重要になることが見出された。さらに、これらに取り組むためには、保護者を含めた関係機関との連携が重要になることから、進路指導に必要な支援のキーワードは「自己理解」「将来のイメージ」「関係機関との連携」の3つであると考えた。

調査を実施した12校では、「自己理解」「将来のイメージ」を踏まえて、一斉指導や個別の対応が行われていた。しかし、一斉指導の場では、個に応じた指導・支援をするにも必要な情報が入りにくいことから、手探りで行っている状態であった。また、生徒自身が他の生徒と異なる対応を望まない場合もあり、対応が難しい状況があった。このように、「自己理解」や「将来のイメージ」に関する指導・支援は、一斉指導の場では対応しづらい状況にあることから、必要な指導・支援を提供するために、個別対応を勧める例もあった。通級指導教室が設置されている学校では、自立活動を参考した指導として対応されており、設置されていない場合は、スクールカウンセラー等によって対応されていた。

「関係機関との連携」については、個々のニーズに応じた機関と連携しており、家庭との連携がうまくいかない生徒の場合は、複数の関係機関と連携し、教員が情報収集等しながら、保護者にも働きかけることで支援を行っていた。

こうした進路指導を通して得られた知見は、学校の知見として蓄積し、より組織的に対応できるような仕組みを整えていくことが望まれる。しかし、多くの学校では、担当する一部の教員が対応している現状であり、校内連携とともに、特別支援学校のセンター的機

能を活用して、進路指導の質の向上を図ることが望まれる。

4. 質問紙調査（本調査）

本調査では、はがき調査（予備調査）で回答のあった学校のうち、公立のみを対象に調査を実施した。回答のあった高等学校の割合は、全日制が 91.7%、定時制・通信制が 8.3%であった。学科は「普通科」が 68.8%で最も多かった。

発達障害等のある生徒に対し、高等学校で取り組んだ指導・支援を、1つの分析の視点として、全日制と定時制・通信制に分けて整理した。その結果、全日制、定時制・通信制とも「対人コミュニケーション力を高める指導・支援」「自己肯定感を高める指導・支援」「自己理解（障害特性を含む）を促す指導・支援」が多かった。また、これらの進路指導に関わる内容は、全日制、定時制・通信制とも、通級による指導で実施しているという回答が多く、通級指導教室の設置校数は少ないものの、通級による指導の内容が進路指導につながっていることがうかがえた。

一方、全日制では、「作業遂行に関する力を高める指導・支援」が、共通する教科や専門学科で開設の教科の中で実施されており、「インターンシップの調整・実施」や「働くことを意識づける指導・支援」は総合的な探求の時間で取り組まれていた。定時制・通信制では「作業遂行に関する力を高める指導・支援」「働くことを意識づける指導・支援」について専門学科で開設の教科や学校設定科目で実施されており、「働くことを意識づける指導・支援」は、総合的な探求の時間でも取り組まれていた。文部科学省（2018a）は学校設定科目について、学習指導要領に示す教科・科目以外の教科・科目について、生徒や学校、地域の実態及び学科の特色等に応じて、各学校が特色ある教育課程を編成できるよう、名称、目標、内容、単位数等を各学校において定めるものとしている。全日制に比べ、定時制・通信制は就職を選択する生徒が多いことから、学校の特色として、働くことに直結するような内容を学校設定科目に定め、積極的に活用していることが考えられる。

連携については、全日制、定時制・通信制とも「基本的な生活力をつける指導・支援」は、保護者に連携を求めている。一方、「自己理解を促す指導・支援」や「メンタルの安定を図る指導・支援」について、全日制では保護者に連携を求めている、定時制・通信制では、関係機関に連携を求めている。定時制・通信制では関係機関と連携が取られていることから支援要請への敷居が低い状況にあり、支援を求める対象に広がりがあることが考えられる。

また、本調査では、好事例の把握に当たり、発達障害について任意の一事例を選定し回答を求めた。その結果、選定された事例の発達障害の種別は、「ASD」が 46.7%、「ADHD」が 40.0%、「LD」が 13.3%であり、診断・判定がある、もしくは本人の気づきがある生徒は 84.5%であった。これらの生徒の進路先は、36.3%が就職（障害者雇用 13.5%、一般雇用 22.8%）、46.2%が進学（大学・短期大学、高等専門学校、専修学校等）であった。

最後に、発達障害等のある生徒の進路指導に関して、好事例となった要因をたずねたところ、「保護者（家庭）の理解や協力」「生徒の自己理解」「校内連携・配慮」「継続的な指導・支援」「情報共有」等が挙げられた。保護者や家庭の理解や協力が得られ、本人の特性理解・自己理解が進んだり、家庭と連携した継続的な指導・支援につながったりすることが発達障害等のある生徒への進路指導には効果的と考えられる。